

『三字經俗解』の翻字および訳注

高橋 俊 三

はじめに

『三字經俗解』は、梅孫著が『三字經』を沖縄の言葉で注解したものである。梅孫著の子孫の竹原孫恭氏が石垣市立八重山博物館に寄贈され、そこに収蔵されている。石垣市立図書館には、その他の竹原氏の寄贈資料とともに写真製本したものがあつた。『三字經俗解』の表紙には「三字經俗解 梅公氏 孫規」とある。その次の丁には

三字經俗解
上卷 籠ル
下卷

梅孫著

とある。これが本来の表紙であつたのである。上卷の末尾には「光緒十壹年乙酉冬十二月誌之 梅孫著」とあり、下卷の末尾には「光緒十二年丙戌春二月誌之」とある。光緒十二年は一八八六（明治十八）年である。この『三字經俗解』の入っている帙の中に、一枚だけ綴じ合わされていないものがある。これを「残簡A」と呼ぶことにする。これと綴じ合わされた上卷・下卷と比較すると、次のような特徴がある（翻字の末尾を

参照されたい)。

①下巻の最後の部分と同じ内容で、組み立て方(二頁に十一行)も基本的に同じある。

②残簡Aは後書きがない。

③残簡Aには朱が多く入っていて、綴じ合わされているものは、その朱を直した文になっている。例えば、落丁のものには「益増スコト」を「益増テ其功アルコト」になるように朱が入っている。綴じ合わせたものは、もともとから「益増テ其功アルコト」となっている。

④上巻と下巻は紙の色(質)が若干異なっているが、残簡Aは上巻と同じである。

⑤残簡Aは、虫食いが多い。

⑥残簡Aは、筆跡がやや太めである。

これらのことから、残簡Aが先に書かれたと考えられる。

さらに、竹原家文書の中の「三字経」の末尾にも一丁ほど、『三字経俗解』の末尾の部分がある。これを「残簡B」と呼ぶことにする(翻字の末尾を参照されたい)。

①残簡Bは下巻の最後の部分と同じ内容であるが、別の組み立て方(二頁に九行)である。

②残簡Bには後書きがない。

③残簡Bには朱が入っていない。また丁寧に書かれている。

これらのことから、これは別の意図のもとに書かれたもので、「三字経」に付けた解説といった感じのものである。おそらく、これが最後に書かれたものであろう。

石垣市立図書館『竹原(孫恭)家文書二』の「梅公姓系図家譜 小宗 我那覇孫規」によれば、孫著は梅

公姓、崎原與人孫廣の七世で、次のような人物である。

① 童名は保久利で、号は義山行一である。

② 一八四六（道光二十六）年、出生。

③ 一八五一（咸豐元）年、数え年の七歳の時に、元服し我那覇と称する。

④ 一八六一（咸豐十一）年、十七歳の時に、登野城村勤学仲師匠となる。

⑤ 一八六六（同治五）年、登野城村勤学講談人となる。

⑥ 一八七五（明治八）年、久米村の神山里之子親雲上に付いて、学問を伝授される。

⑧ 一八八八（明治二十一年）年、八重山島杣山筆者となる。

⑨ 一八九七（明治三十）年、同杣山筆者の廃職とともに、退職する。

⑩ 一九〇三（明治三十六）年、五十九歳で死去する。

『三字経』は、宋の時代に王應麟（字は伯厚）が著したもので、中国で宋朝以来童蒙の教育書として広く流布した。沖縄においても、琉球王府時代に初等教育の書として使われた。比嘉春潮は次のように記している。

七歳で小学校に上がったのが明治二十二年（一八八九）。十二歳の兄も一緒に尋常一年に入った。（中略）入学前にわれわれは家庭で父から古い時代の教育を受けていた。いくつのころからか、兄と一緒にまず漢文の道德経「三字経」をやり、続いて「小学」をやり、巻の二の初めまでやったところで学校へあがった。読み一本やりで暗唱できるまで朗読するのである。三字経までは琉球読みで「サンジチョウ」と

読み、「小学」に入ると大和風に開口読みとし、「立教第一〇りつきようだいいち」と読んだ。これは琉球読みだと「リツチョウデイチ」である。昔の大和口上などはみなこういう開口よみであったから、私の父はもちろん日本読み漢文も和文も読めたが、普通語のはなし言葉はできなかった。格式ばって「それはいかなることか」という調子ならよくわかった。（中略）両親はことばづかいにも特にきびしく、われわれが西原なまりを使うとひどく叱られ、アクセントについてもやかましく直され、干渉された。（『比嘉春潮全集』第四卷評伝・自伝一八五頁）

また、次のように記している。

明治十二年（一八七九）の廃藩置県以前の沖縄における漢文の訓読と直読（音読）の実際について述べよう。

（一）当時のすべての学校（首里・那覇・泊の村学校、平等学校、国学と、久米村の読書学校、明倫堂、宮古・八重山の南北学校）では、漢文はすべて訓読で教えた。

（二）しかし、最初の『三字経』と『二十四孝』は合音訓読（沖縄語の発音による訓読）で、『小学』から『四書』『五経』は開音訓読（日本語の発音による訓読）で、久米村だけは『四書』『五経』までもすべて合音訓読であった。

（三）久米村の読書学校、明倫堂、首里の国学、両先島の南北学校では、将来、漢文の直読、官話の入門として「二字話」「三字話」「四字話」「五字話」を教えた、もちろん直読で。

すなわち原則として将来和文を用いる職務につく大和および国内向きの人は、最初は合音訓読、それから開音訓読を学び、唐向きの職務につくべき人々（久米村人と両先島の通事および官生志願の人々）

は、ずっと合音訓読を学ぶ。(比嘉春潮著『比嘉春潮全集』第三卷文化・民俗 五四一頁)

本書は、当時八重山で『三字経』がどのように読まれたか、また、どのような言葉で講義されたかを知るのに大変貴重な資料となる。

〈凡例〉

(1) 下巻には、節ごとに通し番号が漢数字で付けられているが、上巻には付けられていない。従って、上巻から下巻の最後まで、通し番号を洋数字で付けた。下巻にもともとから付いていた漢数字は(一)に入れた。

(2) 行がえは、原文と同じにした。

(3) 漢字は新字体と旧字体が混じっているが、統一せず、そのままにした。

(4) 句読点が原文に付けられているが、現代の用法と違うので、それを参照しつつ、適宜付け替えた。

(5) 「」は「コト」と記した。

(6) 何度も出てくる単純な誤り(例えば「大祖」)は適宜改めた。

(7) 訳の部分は二字下げにし、行頭に*を付けた。訳は原則として直訳にした。

* * * *

三字經

此書や、宋ノ世ノ伯厚先生、名ヤ應麟ト云人ノ、

*この書物は宋の時代の伯厚先生、名は応麟という人が

聖賢ノ御言ヲ拾ヒ集メ、童^{ワラ}ビノ讀ミ易ク^{ヤス}有ル様ニ、三字完ツ^{注2}

*聖賢の御言葉を拾い集め、児童の読みやすいように、三字ずつ

縁句ツクラツテ、三字經ト名

*縁のある句をお作りになって、三字經と名

付ラツトルモノ。

*付けられているものである。

(注1)「ヤツサ」を朱で消し、「ヤスク有ル」としている。

(注2)「ナアシシ」を朱で消し、「完ツ」(ツツと読む習わし)としている。(注1)とともに、方言を

共通語に直していることになる。

(1)

○人之初 性本善 性相近 習相遠

天ノ生ジラチイ召ル所ヤ、是人ンデ云ン。天ノ人ニ賦リ

*天が初めて生じさせなされたものは、これを人という。天が人に賦与

召^{ミシヤフ}チイル所ヤ、是性ンデ云ン。ヤテ人ノ初、生リ始ノ性ヤ、

* なさったものは、これを性という。そして、人の初め、生まれ始めの性は、
本^{注1}至^{ヨコシマ}タ善ニシテ、邪ネイナランアエエ、シヨンドン、

* 元は最高の善であつて、邪ではなかったけれども、
タトヘバ白糸^{シラ}ノ様ニアテ、自然ニキガリ易サ有^{アル}モンヤテ、

* たとえば、白糸のように、自然と汚れやすいものであつて、

幼少ノ者や、漸々^{ホドウイル}長成ニ至テ、私ノ心物欲ニウフワサツテ、

* 幼少の者は、漸次成長するに至つて、私心が物質欲に覆われて、

本然ノ善ヲ失テ、邪マ穢^{ケガサ}リ道ニ移リ易サル故ニ、

* 本来の善を失つて、邪で汚れの道に移りやすいので、

幼童ノ者ヤテン、捨テ置クベキネヘアラン。ヤレイ邪道ニ

* 幼少の者であつても、捨てておくべきではない。だから、邪道に

ケガサラン中ニ、善事ヲ目聞^{注2}シメヘドンスイ、性ヤ

* 汚されない内に、善事を見聞させたなら、性は

本^ト善ヤル故ニ、本然ノ善ニ移ルコト近サン。若シ父母ノ

* もと善である故に、本来の善に戻ることは近い。もし、父母が

ドン情愛ニ溺^{ウツリ}テ、タシカニ善道ニ導キ教ヘランシンヂ、

* 情愛に溺れて、確実に善道に導き教えずにいたら、

穢^{ケガサ}リタル邪道ニ習ヘドンスイ、性ヤ互ニ善ヨリ放リテ、

*汚れた邪道に習ったりして、性はたがいに善から離れて、

遠クナテ行^{イナヨ}ン。ヤレイ人ノ父母タル者、幼少ノ子ノチャ、

*遠くなつていく。だから、人の父母たる者は、幼少の子供たちを

教へ習ワシヨル道ヲ、能ク知ラネイナランモノンデ。

*教え習わせる方法を、よく知らなければならぬのであるとのこと。

(注1) 24項に「至^{イタク}タ樂ミ」とあり、「至つた」で「最上最高の」の意。

(注2) 「目」は「見」の誤りであろう。

(2)

○苟^モ不^バ教^レ性^チ乃^ル遷^ハ教^ハ之道^{シトス}貴^{スル}以^ラ專^ラ

上ニ云ツトル通イ、幼少ノ子ノチャ、ウカイトニシシ、善道ニ

*上に言っているとおりの、幼少の子供たちは、うっかりして、善道

導キ教ランドンアレイ、本性ノ善ヤ、利欲ノタミニ

*に導き教えないということがあれば、本来の善は、利欲のために

穢リ易サアル故ニ、チャアキ邪マヒガモノ道ニ、ウチヘル

*汚れやすいゆえに、すぐ邪で曲がつた道に、入っていく

モン。ヤツトチンヤ、早ク善ニ導キ教イヨルモノ。其ノ教ノ

*のである。したがって、早く善に導き教えるべきなのである。その教えの

道や、洒掃應對進退ノ節、禮樂射御書數

*方法は、掃除・応答・進退の礼節、礼・樂・射・御・書・數

ノ文、又ハ親ヲ愛シ、君ニ忠シ、兄ニ弟ノ道ヲツクシ、

*の文（を教え）、または、親を愛し、君に忠であり、長者を敬う礼を尽くし、

朋輩ニ信^{マコ}交ルノ道ヲツクシ、少モ間斷ナク、専ラ

*友達に誠の心で交わる礼を尽くし、少しも絶え間なく、ひたすら

タビタビ以テ、教ヨルコトタツトシトシヨルモノ。

*何度も教えることを尊いとするのである。

(3)

○昔^シ孟^ン母^デ 擇^レ鄰^ヲ處^リ 子^ル不^レ學^バ 裁^ニ機^一杼^一

昔シ孟子加那志ヤ、御幼少ウテ父マアシ召フチ、御母親

*昔、孟子様は、御幼少の時に父がお亡くなりになって、御母親の

仇^{シヤウウジ}氏ニ御素立^シラリ召フチ、殿内ネイ召フランアテ、

*仇氏に育てられなさって、（父の）お屋敷には住まわずに、

三所^ル宿移^リシ召フチヤスガ、其ノ内学校所鄰ヤ、マシンデ、

*三か所、住まいをお移りなさったが、その中で学校の隣は良いと（母親は）

御住^{スマ}イ召フチヤコト、孟子ノ戯リアスベ召イルニ、我ガ友ヲ撰ビ、

* お住まいになつたので、孟子が遊びなさる時に、自分の友をよく選び、書籍ヲ講ジ、禮儀ヲ正ニスル真似シ召フチャコト、母ノ

* 書籍を講義したり、礼儀正しく行うまねをなさつたので、母親が

召イニ、「クマウテド誠ニ我子ヲ、素立置ベキ所ヤル」ンデ、

* おっしゃるに「ここは本当に我が子を育てるべき所である」と、

御心ヲ安ンジテ、居トドマテ御素立召イタン。アン

* 安心して、とどまつて、お育てなさつた。そのように

アルニ孟子加那志ヤ、成長ナイ召フチャコト、外ノ師匠ニ

* して孟子様は、成長なさつたので、外の師匠に

ツキ學問シ召フチャスガ、學業未ダ成就ナシ

* ついて學問をなさつたが、學業がまだ成就なさ

召フラン内、ヤアンカイ婦テマンシヤフチャコト、其時

* らない内に、家に帰つていらつしやつた。その時

御母、布織召イル時ヤテ、怒リ腹立シ召フチ

* 母親は布を織つていらつしやる時で、怒り立腹なさつて、

織掛ケノ布、中ヨリ切り捨て召フチャコト、孟子

* 織りかけの布を途中で切り捨てなさつたので、孟子は

恐リ跪テ、其由ヲ乞ウンニヨキタコト、御母ノ召ニ、

*恐れひざまずいて、その理由をお聞きしたので、母親のおっしゃるに

「汝ガ學問ヤ我ガ布織ストフエノモン。布ヤ

*「お前の學問は、私が布を織るのと同じだ。布は

糸ヲ紡ツンデ一寸ニナチ、寸ヲツンデ尺ニナチ、

*糸を紡いで一寸にして、寸を積んで尺にして、

寸尺ヤマンドンアレイ、終ニ丈正ニナテ成就ナヨン。

*その寸尺がたくさんあったら、ついには丈や正の長さにまでなる。

今汝ニ學問成就シミテ、聖賢ナラシメイテインデ

*今、お前に學問を成就させて、聖賢にならせたいと

願テウスガ、汝ガ學問成就サン内ニ、厭イウメ

*願っているが、お前が學問を成就しない内に、厭い飽き

怠リテ、屋ンカイ帰テチヨスヤ、假令バ我ガ

*怠つて、家に帰ってきているのは、たとえば、私が

織掛ケトフル布、未ダ成就ナサン内ニ、中ヨリ

*織りかけている布を、まだ成就しないうちに、途中で

切捨テイストフイノモン。ノウン役立ン」デ召フ

*切り捨てたのと同じである。なにも役に立たない」とおっしゃつ

チヤコト、孟子ヤ感ジ悟テ、孔子ノ御孫^{マク}、

*たので、孟子は感じ悟って、孔子の御孫である

子思ヲ師匠トシ召フチ、夜ルヒル勤ミ学ンデ、

*子思を師匠としなさって、夜昼勤め学んで、

学業成就シ召フチ、終ニ明聖亜聖ノ、大

*学業を成就しなさって、ついに明聖、亜聖と呼ばれる偉大な

儒ト御ナイ召フチヤンデ。

*儒者とおなりになったということである。

(4)

○寶燕山有義方教_{ヘテ}五子_ヲ名俱揚_ル

人之父タル者ノ、子ノチヤ教方ヤ、嚴カキビシヨニシテ、

*人の父たる者が、子供たちを教育するには、厳しくして、

正キ道ヲ以テ教方シヨルモノヤスガ、今ノ世ノ父タル

*正しい方法で教育するものである。しかし、今の世の父

モンヤ、_{モロモロ}諸ノ子ノチヤ教方スルニ、只愛ニウボリテ、

*親は、多くの子供たちを教育するのに、ただ愛におぼれて、

邪_マヒガモノ道ニウチヘス、知ンアスガ、惟_注リ寶燕山ヤ

*邪道に入っていくのを、知らずにいるが、ただ一人寶燕山は、

五人ノ子之チヤ教方シ召ルニ、敬ヲ以テ内ヲ直シ、

*五人の子供たちを教育なさるのに、敬で心の内を真つ直ぐにし、

義ヲ以、外ヲケタニスル法道ヲ以、教方厳クシ召フチ、

*義で外形をケタにする方法で、教育を厳しくしなさつて、

邪マヒガモノ道ニ移ラシミ召フランアテ、五人共父ノ

*邪道に移らせなさらずに、五人とも父の

教ニシタガイ、學業成就スルニ依テ、君ニ召シダサリテ、

*教えに従い、學業を成就したので、君に召し出されて、

各御奉公、己レガ身、君ニユダネテ、忠心ノ誠ヲツクシ

*おのおの御奉公し、自分を君にゆだねて、忠心の誠を尽くし

召フチ、其善名ヲ五人トモ後ノ世ニ名揚テ、父母ノ

*なさつて、その名声を五人とも後の世に揚げて、父母の

名ヲアラワシ召ヘタンデ。

*名を著しなさつたとのことである。

(注1) 寶燕山は寶禹鈞の異名。

(注2) 「化他」(他人を教化し、功德を施す意)か。

(5)

○養^テ不^レ教^ハ父^ノ之^ノ過^{ナリ} 教^テ不^レ嚴^ハ師^ノ之^ノ惰^{ナリ}

人ノ父タルモンノ、子之チャ素立養フニ、只慈愛ニマカチ、

*人の父たる者が、子供たちを育て養うのに、ただ慈愛に任せて

飽ニ食シメヨイ、アタダカニケ^注ラシメ居リ、ウル所ヤソラカ

*飽きるまで食べさせて、暖かに暮らさせて、住んでいる所を安らかに

ニシテ、安逸^注ホシヘママニナラシミテ、良師ヲ求ミテ

*して、安逸をほしいままにさせて、良い師を求めて

嚴^{キビシ}ク正道^{タダシキ}ニ教^テラシミラ^ンドンアレイ、父ノ過^チヤルモノ。

*厳しく、正しい道に教え導かなかったら、それは父の誤りである。

又教ヘ導ヘテ五倫ノ次第、禮義廉恥等ノ

*また、教え導いて、五倫の仕方、礼儀・廉恥などの

道、嚴ク守ラサ^ンドンアレイ、師匠ノ惰^チリヤルモノ。

*道徳を厳しく守らせなかったら、それは師匠の怠惰である。

(注1)「ケ」は「ク」の誤りであろう。

(注2) 安らかにして。

○子^{トシテ}不^ル學^ハ非^ズ所^ニ宜^キ幼^{ニシテ}不^バ學^ハ老^テ何^ヲ為^{サン}

人ノ子タルモンノ、師匠父ノ教ヲ受テ學問成就シシ、

*人の子たるものが、師匠や父の教えを受けて、學問を成就して、

智識ヲ至ラシ窮テ、習イシルノ功有テ、勤ミ行ワン

*智識を窮めて、習知の功績があつて、勤め行わなかつ

ドンアレイ、假令^{タトヘ}、他事^{カシクキ}ニ伶俐氣量アタンテイカ、

*たら、たとえ他の事において賢い器量があつたにしても、

宜^{ホミ}ク美^{イトキ}ベキ所ヤアラン。ヤレイ、幼^{イトキ}ナキ時ウテ、前ニ云

*ほめるべきではない。それで、幼少の時に、前に言つ

チイル通イ、學ベ習テ行ナワンドンアレイ、年老テ

*ているとおりに、學習して行わなかつたら、年老いて

事物ノ道理暗^{クラク}ニアテ役立ンシシ、恥辱ヲ受ルコト

*事物の道理に暗くて、役に立たず、恥辱を受けることが

シバシバアツテ、後悔シヨンドン、チャアシ取イ帰シノ

*しばしばあつて、後悔しても、どうして取り返しが

ナラフヤ。

*できようか。

(7)

○玉不琢不成器 人不學不知義

水晶^{ヒカリ}ノ玉ヤ、本ヨリ潔白ニアルモンヤスガ、琢キモテ

*水晶の玉は、本来潔白なものであるが、磨き取り扱わ
ナサンドンアレイ、用ル所ネインシンジ、夫々ノ用ニ立ン

*なければ、用いる所がなくなり、それぞれの用に立たず

シヨテ、器ノ道具トヤナラン。ヤレイ人モ美才智^{ヨキ}

*に、器の道具とならない。それで、人も良い才智・

気量アタンテイカ、勤メ學バンドンアレイ、義理ノ

*器量があつたとしても、勤め学ばなかったら、義理の

道ヲ分チシルコト、ナランシンヂ、事ノ善悪是非ヲ

*道を理解することができずに、事の善悪・是非を

分チ知ン、愚人ナテ行ルモノ。アンアル故ニ、人々幼少^{イチヨ}

*区別できず、愚人になつていくのである。それ故に、人々は幼少

ノ時ヨリ勤ミ学バシヨルコトヤ、尤モ緩^{ヨルガ}シニスベカランモノンデ。

*の時から勤め学ばせることは、最もゆるがせにすべきではないとのこと。

(8)

○為^テ人子^ト 方^ニ少^キ時^ニ 親^ミ師^ヲ友^ニ 習^ヘ禮^ニ儀^ヲ

凡^レテ人ノ子タル者ヤ、方^{マサ}ニ幼少ノ時ニ、明師ニ

*すべて人の子たる者は、まさに幼少の時に、学に明らかな師に

親^{シタシ}ク近キ、良友ニ交リ結デ、禮儀、程克ノ

*親しく近づき、良友に交わつて、礼儀・程克^注の

節^{カギン}、親ヲ愛シ長ヲ敬スルノ道ヲ講シ、明ニ

*節度、親を愛し長者を敬う方法を講じ、明らかに

習ハシミテ、徳ニ進ミ業ヲ修ムノ道ヲ以テシメ

*習わせて、徳に進み業を修める方法でさせ

ヨス、立^レ身ルノ本ヤルモノ。

*るのは、身を立てる基本である。

(注1) 未詳語。

(9)

○香^ハ九^{ニシテ}齡^{クム} 能^レ温^ヲ席^{アルコトハ} 孝^ニ於^ニ親^ニ 所^ニ當^ニ執^ル

昔^シ後漢ノ世ノ黄香ト云人ヤ、親ニ孝順ノ次第、

*昔、後漢の時代の黄香という人は、親に孝順する次第を

能御知^{ヨク}り召フチ、心ヲ盡シ孝養シ召イタン。ノガヤレイ、

*よく知りなさつて、心を尽くし孝養しなさつた。どのようなことかという、
九ツノ年ウテ、親ニ孝養シ召イタルコトヤ、冬ノ寒^{ヒヤ}ル時ヤ、

*九歳の時に、親に孝養しなさつたことは、冬の寒い時は、
身ヲ以テ其親ノ、ウウド・ハダ^{ムシロ注一}席ヲアタタミテ、^{アタタカ}温ニ御安ス^{ヲソイ}

*自分の体でその親の布団やむしろを暖めて、温かくおやすみに
召^{注二}フラシ、又夏ノアツサル時ヤ、其親ノ枕・席ヲ扇キ

*なるようにして、また、夏の暑いときは、その親の枕やむしろを扇いで
涼^{スダ}シクナチ、御安召フラチ、ウノゴト幼少ノ時ウテ

*涼しくして、おやすみになるようになさつた。このように幼少の時に
子タルノ職分ヲ知テ、晨昏定省^{注三ウクタラ}怠^ウンゴト、親ニ

*子たる職分を知つて、朝夕に定省を怠らないように、親に
孝道ヲ盡シ召フチ、名天下ニアラワチイ召イン。

*孝道を尽くしなさつて、名を天下に著してらっしゃる。
ヤレイ人ノ子タル者ヤ、ウノゴト是ヲ手本トシテ、

*た。誰でも人の子たる者は、このようにこれを手本にして、
我が身ニ執リ守ルベシ。アンアル故ニ、百行ノ首^{ハジメ}ヤ孝

*自分で実行するべきである。それ故に、あらゆる行動の始めは

道ヲ以テ先務トスベキ所^ルヤルモンデ。

*孝道を先に努めるべきであると（の意）。

（注1）敷布団用のむしろ。沖繩では昔、敷布団は用いなかった。

（注2）ツエーシミセーン（おやすみになる）の使役態の中止法であろう。

（注3）親に仕えて、晩にはその寝具を安らかに整え、朝にはその安否如何を省み問うこと。

（10）

○融^{ハニシテ}四^{ニシテ}歳^ハ 能^ク讓^ル梨^ヲ 弟^{アルハ}於^ニ長^ニ 宜^ク先^ツ知^ニ

凡テ兄弟友愛ノ道ヤ人々皆天性ドヤスガ、幼少ノ時ヤ

*すべて兄弟友愛の徳は人々皆天性であるが、幼少の時は

食物^{カミモン}ノ欲^{ヨク}ニヒカサツテ、キソイ争ヨルモン。ヤスガ、後漢ノ世ノ

*食物の欲にひかれて、争うものである。しかし、後漢の時代の

孔融ト云人ヤ、四ツノ年ウテ、兄ヲ敬イ讓リノ道

*孔融という人は、四歳の時、兄を敬い讓る道德を

知^{シツ}チヤウタンデ。ノガヤレイ、アル時^{ベツ}別^{ナシ}カラ梨^{ナシ}ノナイ

*知っていたとのことである。どのようなことかという、ある時他の所から梨の実を

送^{ツク}テイルモンノアテ、親ヤ子ノチヤアニ與^{アタ}ルニ、兄弟トモ、

*送つてきたことがあって、親や子供たちに与えるさいに、兄弟とも

梨ノナイノ粒マギサ小サ、数ノ大サイキラサノ一件、

* 梨の實の粒が大きい小さい、数が多い少ないということ

ヨザイシシウタスガ、孔融ヤ静ニ居テ「ワンヤ弟ヤヤ

* 言い争いをしていたが、孔融は静かにして「私は年下で

ビイコト、アトカライツツン小サス取ヤビン」デ云チ、兄

* すから、後から一番小さいものを取ります」と言つて、年長

ザノチヤアト、ヨザイサンゴト譲タンデ。ウノゴト幼少ヤスガ、

* 者たちと、言い争いをしないように譲つたそう。このように幼少だが、

兄ヲ敬イ 恭^{ウヤウヤシ}ク、譲リノ道ヲ知テ、睦^{モツマシヨ}敷ニシヤウタン。

* 年長者を敬い、うやうやしく、謙譲の道徳を知つて、睦まじくしていた。

ヤレイ人ノ子タル者ヤ、人倫ノ道厚ク、兄弟義睦敷、

* したがって、人の子たる者は、人倫の道徳に厚く、兄弟が睦まじく、

重ニシヨス、幼学ノ者ノ知ルベキ所ヤルモノ。

* 尊重するのは、幼学の者が知るべき所なのである。

(11)

○首^{トシ}孝弟^ヲ 次^ニ見聞 知^リ某^ニ数^ヲ 識^リ某^ニ文^ヲ

凡テ人ノ子タルモンヤ、幼少ノ時ヨリ、弟^注一父母ニ孝

*すべて人の子たる者は、幼少の時から、第一に父母に孝

道ヲツクシ、兄ニ弟ノ道ヲ盡シテ、恭ク敬モフノ道ヲ

*道を尽くし、兄に弟の道を尽くして、うやうやしく敬う道を

始トシ習イ、次ニ聖賢ノ經書學べ、其行ヘノンジヤイ、

*初めに習い、次に聖賢の教書を学び、その行為を見て

ヨシ悪ヲ分チ、ソリゾリノモノノ数ヲ知り、又ソリゾリノ

*善し悪しを区別して、それぞれの物の数を知り、また、それぞれの

文儀ノ則法ヲ知り、信ニ見イ聞イスルコト、ジキニ廣ク

*文儀の規則を知り、真実に見たり聞いたりすることがすぐに広く

知り、知ルコトジキニ深ニナイドンスイ、云ル言バトガミイキ

*知り、知ることがすぐに深くなったら、言う言葉を咎めることが少

ラクナテンジ、行フコト悔ミイキラクニナヨルモノ。

*なくなつていき、(自分の)行為を悔やむことが少なくなるものである。

(注1)「第」の誤り。以下では、訂正して翻字する。

(12)

○一而十 十而百 百而千 千而萬

凡テ人ノ子タルモンヤ、六ツノ歳ニ成ドンスヘ、壹貳ノ

*すべて人の子たるものは、六歳になると、一、二の
数知サネイナランモンヤレイ、壹ツ次第第二満^{ミナ}

*数を知らせなければならぬのであつて、一が次第に満ち
ドンスイ拾二ナヨン。拾ヨリシシンジ百二ナヨン。百ノ次第二

*れば拾になる。拾より進んでいき百になる。百が次第に
満ドンスイ千二ナヨン。千ヨリシシンジ萬二ナヨン。

*満ちれば、千になる。千より進んでいき万になる。
萬ヨリシシンジ億二ナヨン。億ヨリシシンジ兆二ナヨン。

*万より進んでいき億になる。億より進んでいき兆になる。
夫ヨリ次第第二満ドンスイ、ハカリ無^{ナキ}数二ナヨル

*それから次第に満ちると、計算できない数になる
モノ。カンヤツ時ヤ幼少ノ者ヤ第一是ヨリ先^キ

*のである。それ故に幼少の者は第一にこれより先に
知ラサネイナランモノ。

*知らせなければならぬのである。

○三才者^{トハ} 天地人 三光者^{トハ} 日月星

混沌ノ氣輕クスミルモノヤ、上ニ浮^{ウカビ}テ天トナイ、

*混沌の氣で軽く澄んだものは、上に浮かんで天となり、

重クニゴリルモンヤ、下ニ氷^{コブリ}テ地トナイ、天地

*重く濁ったものは、下に氷つて地となり、天地

陰陽配合、萬物^注天ヨリ諸^ルノ萬物生ジラチヘ、

*陰陽配合し、天より諸々の万物を生じらせて

召イル内、惟人イツツン貴^{タツ}トシト、シヤウルモンヤテ、人ヤ

*いらつしやる内、ただ人を一番貴いものとなさったので、人は

萬物^{マサシ}ノ靈キト、ナトフン。アンアルニ三才ハ天地人デ

*万物の靈長となっている。それゆえに三才とは天・地・人と

云ン。日ヤ陽ノ精ニモトツイテ、盡^{ヒロシ}照シノゾミ、

*いう。日は陽の精に基づいて、広く照らし臨み、

月ヤ陰ノ魄ニモトツイテ、夜ヲ光リアキラカニシ、

*月は陰の魂に基づいて夜を光り明らかにし、

星ヤ天ニ連^{ツラニ}トマツテ光^{カガヤク}リ輝。故ニ三光ハ

*星は天に連ね留まって、光り輝く。故に三光は

日月星ンデ云ン。此天地人、日月星アル故ニ、昼夜

*日・月・星という。この天・地・人、日・月・星がある故に、昼夜

寒暖ヲ分チ、是ヨリ萬物生育スル故ニ、萬物ノ

*寒暖を分けて、これより万物生育する故に、万物の

始ミヤルモノ。

*始めなのだ。

(注1)「萬物」は衍字か。

(14)

○三綱者^{トハ} 君臣義^ノ 父子親^ノ 夫婦順^{ナリ}

天地ノ間ニ三光^{アイタ}アツテ、萬物ヲ生育シ、人トシテ

*天地の間に三光があつて、万物を生育し、人間として

父子君臣夫婦ノ三綱ニイランドンアレヘ、国家ノ道

*父子・君臣・夫婦の三綱に入らなければ、国家の道が

立ンモン。ノガヤレヘ、君ヤ臣下ヲ憐^{アワリミ}、臣下ヤ君ニ忠盡^{ツク}シヨス、

*立たないのである。なぜならば、君は臣下を憐れみ、臣下は君に忠を尽くすのは、

是君臣ノ義ヤルモノ。又親ヤ子ヲイツクシミ、子タル

*これ、君臣の義である。また、親は子を慈しみ、子たる

モンヤ孝ノ心盡シヨス、父子ノ親ミヤルモノ。又夫ヤヲト

*者は孝の心を尽くすのは、父子の親しみである。また、夫は

妻ヲ愛シメゴミ、妻ヤ何篇夫ノ下知ニ随イ、ソモキウツ

*妻を愛し恵み、妻はどのようにしても夫の命令にしたがい、背き

モデランアス、是夫婦ノ順ヤルモノ。此三ツノ者ヤ注一

*すねないのが、これ夫婦の順である。この三つの物は

三綱ンデ言チ、人間ノ大イナル本ヤレイ、此道ヲ

*三綱と言って、人間の大本なので、この道を

順ニ執リ守リ行ヘドンスイ、天地清クキヨシ注二寧ニシテ、ヤスク

*順に守って行えば、天地は清く安寧で、

国家平カニ安ンジテ行ルモノ。タイラ

*国家は平安になっていくのである。

(注1) mudijunは「ひねくれる。すねる」の意。モデランはその否定形。

(注2) 「キヨシ」の「シ」は衍字。

(15)

○日春夏 日秋冬 此四時 運不窮リテマラ

コマヤ、年歳トシトシ四時ノ次第云ツトン。春ヤアツタカ暖ニシテ、

*ここは年々四季の次第を言っている。春は暖かく、

萬物ハツ發生ノ氣ヲツカサドリ、夏ヤアツ暑クニシテ、

*萬物を發生させる氣を司り、夏は暑く、

生長シイノ氣ヲツカサドリ、秋ヤヒヤヤカ冷ニシテ、萬物ミノリ登

*生長の氣を司り、秋は冷たく、萬物が実り、

熟ヂヨクシヨイ、冬ヤサムク寒ニシテ、萬物トジホサガヨイ、此ノ

*熟して、冬は寒く、萬物閉じ籠もる。この

四時メゴリメゴツテキリニマ窮ラン。年シツジツ注一(々)時節々ノ次第分キヤ、千萬年ノ末スヘ

*四季は巡り巡って窮りない。年々時節時節の次第分けは、千万年の末

マデ云チ尽ツクサランアルモノ。

*まで言い尽くされないのである。

(注一)「年々時節時節」とするか「年々節々」とするのが適當である。

(16)

○曰ク南北 曰ク西東 此ノ四方 應ス乎中ニ

コマヤ四方ノ位クレイ、云チアン。火ヤミナメ南トシ、水ヤキタ北トシ、

*ここは四方の位(方位)を言っている。火は南とし、水は北とし、

金ヤ西^{ニシ}トシ、木ヤ東^{ヒンガシ}トシ、此四方土ヤ中央^{ナカバ}ニ

*金は西とし、木は東とし、土はこの四方の中央に

ナテ、東西南北ノ四ツヲ生育^{セイイク}スルモンヤレヘ、

*なり、東西南北の四つを生育するものであつて、

土ヤ、タトヘバ仁義禮智ノ信^トニタトラツテ、

*土は、たとえば仁義礼智の信に譬えられて、

四方ノ旺将^{ワウシヤウ注一}ト、ナトン。

*四方の旺将となっている。

(注1)「旺盛なもの」という意か。五行の「旺相」と関係ありそうである。なお、「旺」の左側に「カ

ガヤク」と意味が書かれている。

(17)

○曰^ク水火 木金土 此五行 本^{ツク}乎^ニ數^ニ

コマヤ五行ノ次第云チアン。水火木金土、此ノ五行

*ここは五行の次第を言つてある。水・火・木・金・土の五行の

ヒトツ連^{トテ}ン欠ドンスイ、萬物生育シガテイモンヤル。故ニ、

*一つでも欠けたら、万物は生育しにくいのである。故に、

五行互^{タガイ}ニ相生ジテ、萬事^{マンマ}万^{マン}物ノ數^{モト}ニ本ツチャウル

*五行は互いに生じあつて、万事万物の数に基づいている

モンヤレイ、天下ノ道理、是ニ依テ出ル故へ、又天

*ものだから、天下の道理は、これから出ている故に、また、天

下ノ数、此五行ニ依テ、押ハカリ知ルモン。ヤツ

*下の数、この五行によつて、推し量り知るのである。それ

時ンヤ、知ンアテイスマンモノ。

*故に、知らなくてはならないのである。

(18)

○曰仁義 禮智信 此五常 不容紊

仁義禮智ノ此ノ四ツヤ、人々天ヨリ賦リ與ヘラツテ、

*仁・義・礼・智のこの四つは、人々が天より配り与えられて、

常ニ執リ行フ所ノモノヤン。ヤレイ、仁ヤ人ヲイツクシミ、

*常に執り行ふべきものである。それで、仁は人を慈しみ。

恵ミ施シ與ヘ、義ヤ心固ニシテ、邪道ヲ耻トシ、

*恵み施し与え、義は心を堅固にして、邪道を恥とし、

禮ヤ己ヲ謙テ、人ニ譲リ、智ヤ事ノ是非ヲ

*礼は己をへりくだつて、人に譲り、智は事の是非を

分シヨルモン。ヤレイ、此四ツヤ、信^{マコ}眞實ニナランドンアレイ、

*分けるものである。それで、この四つは、信が本物でないと、

仁義禮智ヲ全ク保チ守ルコト、ナラン。カンヤツ

*仁・義・礼・智を全く守ることが出来ない。それ

時ヤ、此五常^{注一}ミダラチイ、スンベカランモノ。

*故、この五常を乱してはいけないのである。

(注一) 常に行わなければならない五つの事。

(19)

○稻梁菽^{トフリヤウ ショク} 麥黍稷^{バク ショ ショク} 此六穀 人所食^{ノ スル}

コマヤ人ニ五常アイ、天地ニ六穀アルコト云チアン。六穀ヤ

*ここは、人に五常があり、天地に六穀あることをいつてある。六穀は

ノガヤレイ、米・粟・豆・麥^{モギ}・黍^{キビ}・稷^{アヲ注一}、此六穀ヤ人々

*何かというと、米・粟・豆・麥・黍・稷で、この六穀は人々が

平日食用スル所ノモンヤテ、欠ギベカランモン。

*平日に食用にするもので、欠くことができないものである。

ヤツ時^{トキン}ヤ、節々^{ツク}後リランゴト、作ラネイナランモノ。

*それで、時節時節に遅れないように、作らなければならないのである。

(注1)「キビ稷」は「稷」が適切である。

(20)

○馬牛羊 鶏犬豕 此六畜 人所飼

コマヤ、人ノ用ニ立ウル六畜養フベキ所ノコト、云チアン。

*ここは、人の用に立ちえる六畜を養うべきことを、言つてある。

ノガヤレイ、馬ヤ重キ荷ヲムタシメテ、遠方往還ノ

*すなわち、馬は重い荷を持たせて、遠方を往還する

事用ヲ達シ、又軍場ノ助ヲナシ、又牛ヤ田畠ヲ

*用事を達し、また、戦場の助けをなし、また、牛は田畑を

耕サシメテ、人ノ助ヲ補ワシメ、又犬ヤ夜ヲ守テ、主人ニツイテ、

*耕させて、人の補助をさせ、また、犬は夜を守つて、主人に

盗人ノ患ヲホシガシメ、又鶏・羊・豕ノ内ニ、鶏ヤ曉ノ

*盗人の憂いを防がせ、また、鶏・羊・豚の内で、鶏は曉の

時ヲ司リ、其時失ワン。羊豕ヤ、先祖宗廟ノ祭り、

*時を司り、その時を失わないように、羊や豚は先祖宗廟の祭祀、

其外、薬用身ノ保養ノ用ニナサシメヨ。如レ此ヤツ時ヤ、

*そのほか、薬用や身の保養の用にする。このような訳で、

用ル時其ノ時、失^{ウシナ}ワンドンアレイ、後^{アト}ニシン差ツマラン

*用いる時、その時を失わなければ、あとでさしつもら

モンヤテ、此六畜ヤ人間ノ常ニツカナアヨル所ノ

*ないので、この六畜は常に飼育するべき

モノンデ、定ラツテウン。

*ものと、定められている。

(21)

○曰^{クキ}喜怒^{トラ}

曰^{アイゴ}哀懼

愛惡^{アイアク}欲^{ヨク}

七情具^{ソナワル}

コマヤ人間ニ七情具ワトフルモンヤスガ、動^{ウケキ}テ仁惡ニナルコト、

*ここは、人間に七情が具わっているが、それが動いて仁(善)や惡になることを云チアン。喜び・イカリ・哀ミ・恐リ・愛シ・惡ミ・欲思へ慕ブノ

*言つてある。喜び・怒リ・哀ミ・恐レ・愛シ・惡ミ・欲の

七情ヤ、人ノ常ニ有ル所ノモノヤテ、聖賢御ヤイ

*七情は、人が常に有しているものであつて、聖賢で

召フチン、具ワランデルコトヤ、ネイ召フラン。ヤンドン、

*いらつしゃても、具わらないということはない。だけど、

喜ブベキニ悦ベ、哀ムベキニ悲ミ、其ノ發シアラワスゴトノ

*喜ぶべき時に喜び、悲しむべき時に悲しみ、その発し表すことが
理ニアタイドンスイ、君子仁人ヤルモノ。怒ルベキヲアワレミ、

*理にあたっているのが、君子・仁人であるのだ。怒るべきを憐れみ、
悪ムベキヲ愛シ、ウノゴト七情ノ發スルコト、理ニアタ

*憎むべきを愛し、このように七情を發することが、理に当た
ランドンアレイ、小人ノ悪人ヤルモノ。

*らないのが、小人・悪人であるのだ。

(22)

○匏土革 木石金 與絲竹 乃八音

コマヤ八音ノ音樂^{ウシガク}ノ音^{ウツ}ノ、物ヲ感動シメテ、神ム人ム^{カミ}

*ここは、八音の音樂の音が、物を感動させて、神も人も

和合ナラシミルコト云チアン。ノガヤレイ、匏・土・革・木・

*和合させることを言つてある。どのようなことかという、ひさご・土・革・木・

石・金・絲・竹、乃^{イマ注}シ此ノ八ツノ音樂^{ウシ}ノ音^{ウツ}ヤルモノ。

*石・金・糸・竹、すなわちこの八つの音樂の音である。

此樂^{ガク}ヤ黄帝ノ御身シシ、御制作^{シイサク}召フチ、

*この樂は黄帝が御自身で、御制作なさつて、

五帝三王ム各音楽有テ、御用^{ウムチ}へ召フチ、

*五帝三王もおのおの音楽が有つて、お用いなさつて、

上帝ヲ奉ラシ、鬼神ニマツリ、宗廟ニススミ、賓客

*上帝に奉り、鬼神に祀り、宗廟に進み、賓客を

飲酒ノ時、ガクニアランドンアレイ、宜^{ヨルシカラ}ン。上タイ下タイ、^{ノブ}

*飲酒で歓待する時、樂でなければ、よろしくない。上ったり下ったり、
揖讓ガクニアランドンアレイ、和合サン。アンヤテ、互イニ

*拱手の礼をするとき、樂でなければ、和合しない。それだから、互いに
進ムコトノベ通ジ、調和ノベシキ、^{注2}誠ト敬ヲ導^{ツツシミ}キ、

*進むことを述べ通じ、調和を述べ伝え、誠と敬い（慎み）を導き、

性情ヲノベ、感格ヲ明ラカニシ、威儀ヲ助キ、ウノゴト

*性情を伸ばし、感じいたることを明らかにし、威儀を助け、このように

禮樂ソナハツテ、功ノ成就ナルヲ、ウサミヨルモン。ヤレイ、

*礼樂具わつて、功が成就することを、修めるのである。それだから、

ガコノ用^{ヨウ}ノ大イナルコト、ウノ通イヤテ、禮樂トノ

*樂の用が大であることは、この通りであつて、礼と樂との

二ツニヤ、イチヨタノ間ヤテン、身ヨリ放スベカランデ、^{ハナ}

*二つには、しばらくの間でも、身から放してはいけなと、

云召フチヘス、是此ノ謂リヤルモノ。

*おっしゃているのは、こういいたいわれなのである。

(注1) たった今。更にもう。もつと。

(注2) 「敷暢」を訳したもので、「長くいつまでもあまねく伝わるようにする」の意。

(23)

○高曾祖 父而身 身而子 子而孫

自_リ子孫 至_ル元曾_ニ 乃_チ九族_{トシ} 人之倫_{ナリ}

コマヤ九族ノ次第云チアン。ノガヤレイ、我ヨリ上ニ

*ここは九族の次第が言つてある。すなわち、自分より上に

高祖父母、曾祖父母、祖父母、父母、此四所_{トクル}、我ヨリ下ニ

*高祖父母、曾祖父母、祖父母、父母、この四人で、自分より下に
子、孫、曾孫、玄孫、此ノ四ツヤレイ、玄孫ヨリ元孫ニ至_{注3}ル

*子、孫、曾孫、玄孫、この四人で、高祖父母より玄孫に至る

迄、乃_{イマシ}九族ヤルモノ。其間ニモロモロノ子孫ニツイテ、

*まだが、すなわち九族である。その間にもろろの子孫について、

親疎、遠近、尊卑、長幼アルモン。ヤツ時ヤ、恭敬、

*親疎、遠近、尊卑、長幼の次第がある。それで、恭敬、

慈愛ヲイタシテ、其次第ミダラチイスマンモン。

*慈愛を尽くして、その次第を乱してはいけないものである。

凡テ此親族、諸父兄弟子孫、皆天倫ヤテ、一本ノ

*そもそも、この親族、もろもろの父兄弟子孫などは、皆天倫であつて、一つの

源ヨリ生マリタウルモン。ヤツ時ヤ、厚ク厚フニ敬ミ愛シテ、

*根元より生まれているのである。それで、厚く厚く敬愛して、

睦敷^{モツマンシヨウ}ノ心ウトルイテヘスマン。ノガヤレイ、本ト治イドンスイ、

*睦まじくする心が衰えてはいけない。すなわち、本が治まれば、

末ミダリラン、基本ミダリテンジ、末^{ウサマヨ}治ルモンヤ、未ダ

*末も乱れない。基本が乱れていつて、末が治まるというのは、まだ

此ノタミシネイラン。又其本、堅固^{ケンコ}ナイドンスイ、

*例がない。また、基本が堅固になれば、

枝葉ヤ生リマサラチャフン。基本ソクナイドンスイ、

*枝葉は生長している。基本が損なえば、

枝葉共ニ亡^{ホロ}ベヨン。ヤレイ、此道理、深ク心ニ感ジテ、

*枝葉ともに亡びる。それで、この道理を深く心に感じて、

太祖ヲ厚ク厚フニ重^{ウモ}ンジラネイナランモノ。

*太祖を厚く厚く重んじなければならないのである。

(注1) ここの「元」は玄孫(曾孫の子)のこと。清朝の人は康熙帝の諱の「玄暉」を避けて「元」に改めた。(『新譯三字經』参照)

(注2) 「高祖父母ヨリ玄孫ニ至ル」とあるべきであろう。

(24)

○父子恩 夫婦従 兄則友^ハ 弟則恭^ハ

長幼序^{アリ} 友與^レ朋 君則敬^{アリ} 臣則忠^{アリ}

此十義^ハ 人所^ル同^{ジキ}

コマヤ九族ノ次ニ人倫ノ次第二十義アルモノ。ノガヤレイ、

*ここは、九族の次に人倫の次第に十義あること(が述べてある)。すなわち、

家内ニ於テヤ父ハ子ヲ恵ミ、慈シ^{イソク}ミ、子ヤ其恩ヲ

*家庭内において、父は子を恵み、慈しみ、子はその恩を

辨^{ワキマ}ヘテ、孝道ヲ盡シ、夫ヤ和順ニ妻ヲ導^{ミナシ}キ教イ、

*弁えて、孝道を尽くし、夫は和順に妻を導き教え、

妻ヤ何篇夫ノ下知ニ従ヘ、兄ヤ其弟ヲ友愛シ、

*妻はどんなにも夫の下知に従い、兄はその弟を友愛し、

弟ヤ其兄ヲ恭敬シ、此通イ行ヘドンスイ、誠ニ

*弟はその兄を恭敬する。このとおりに行いさえすれば、誠に

天倫ノヨキ徳、家内ノ至^{イタツ}タ樂ミヤルモノ。此道ニ案ジテ

*天倫の良い徳、家庭内の至上の楽しみなのである。この道を案じて守^{ウクナ}リ行ワンドンアレイ、一家失ナアヨン。又外ニ於テヤ

*守^{ウクナ}リ行わなければ、一家を失う。また、外においては、年^{ウツト}兄タルモンヤ、若^{ワカ}キモノヲ慈^{イツクシ}ミ、恵ミ、年弟

*年が上である者は、若者を慈しみ、恵み、年が下タルモンヤ、兄^ザ方ニ弟之道ヲ尽シ、坐ス時ヤ兄ヲ

*である者は、年長者に年少者の道を尽くし、座る時は年長者を上^ミニシ、弟ヤ下座ニシヨス、是長幼ノ次第。朋友ノ

*上にし、年少者は下座にする、これが長幼の次第である。朋友の道ヤ互ニ仁ニ導イテ、生死ヲトモニシ、情愛苦樂ヲ

*道は互いに仁に導いて、生死をとモニし、情愛苦樂をヒトシヨニシ、又君臣ノ道ヤ、君タル人ヤ其民ニ臨ムニ、

*等しくし、また、君臣の道は、君たる人はその民に臨む時に、嚴^{ウケツ}カキビシク、恭^{ヲヤラヤシヨ}フニ敬^{ツツシ}ミ、其位ニ在^{イマ}シテ、恩威ヨルヤカニ

*厳かに厳しく、うやうやしく慎み、その位にいらつしやつて、恩威ゆるやかで、恵ミ有テ、臣下御使へ召イヨイ、又臣下タルモンヤ、

*恵みがあつて、臣下をお使いなさる。また、臣下たる者は、

ヒカリ明カタダシク大イニシテ、其心ヲ君ニヨダニテ、

*光明正大であつて、自分の心を君にゆだねて、

ウウヤ カドツキ注一 マコト
公ギ 廉、信ニシテ、其職分ノ忠節ヲ尽シ、

*公正・清廉で、信の人であつて、その職分の忠節を尽くし、

御奉公シヨルモン。ウノゴトシイドンスイ、國モ和カ平ニ治リ、
ヤウラ タイラカ

*御奉公するものである。このようにすれば、国も平和に治まり、

クハツ
化ラス道大ニ行ナハリヨン。若シ、此ノ道ニアランドン

*教化の道が大に行われる。もし、この道でなければ、

アレイ、チャアキ君モウゴリ、臣下モ佞フ心、日々ニサカンニ
ヒツラ

*すぐに君も驕り、臣下もへつらう心が日々にさかんに

ナテ、國ニミダリヨルモン。ヤツ時ヤ慎ンアテイ、濟ンモン。
ツツシマ

*なつて、国が乱れるのである。それで慎まなければ、すまないのである。

ヤレイ、此十義ヤ人々、鬼神共ニ、此ノ理ヲソナワツテ、

*それで、この十義は人々、鬼神ともにこの理を具えて、

皆人道之方ニナシ行フベキ所ノモノ。ヤツ時ヤ同ク
マサニ

*すべての人がまさに行くべきことなのである。それで同じく

執イ守ラネイナランモンドヤルデ。

*とり行わなければならないものであると（の意）。

(注1)『新譯』は「友與朋長幼序」のように一句に読み、「父・子・夫・婦・兄・弟・長・幼・君・臣」と解釈する。

(注2)「公廉」は公正で清廉である意。「カドヅキ」の意味は不明。

(25)

○凡訓蒙 須講究 詳訓詁 明句讀

凡テ幼ナキ童蒙ノワラビノチヤ、教方スルネイ、一十ノ

*一般に幼くて道理にくらい子供たちを、教育するには、一十の

数、ソリゾリノ日ノ数ヘ、ソリゾリノ文儀ノ道理、講シ

*数、それぞれの日の数、それぞれの文儀の道理、講じて

キワミルコト教ヘ、又其文字ノ意 出ル所ノ源ヲ

*窮めることを教え、また、その文字の意味の根元を

詳カニ考エアラワシミ、凡テ經書ノ義ニツイテ

*詳しく考え表せて、すべての經書の意義について

一句半言ムノコサンゴト、明ニ覺ヘ悟ラシメイス、

*一句半言も残さないように、明らかに覚え悟らせるのが、

是學問ノ次第ヤルモノ。

*學問の順序なのである。

○爲^ル學者^ハ 必有^リ初^メ 小學終^テ 至^ル四書^ニ

凡テ學問スルノ道ヤ、漸々進ムコト要^メトスベキイ、

*一般に學問する方法は、すこしずつ進むことを要とすべきで、

初学^{シヨ}ノ者ヤ淺^{アサ}キヨリ深^{フカ}キナライドンスイ、道理

*初学の者は浅いところから深いところへ（順に）習えば、道理を
合点^{ガツテン}シシ、心ニ入^{ヤツサ}アテ、通ジランアルノ憂ヘイキ

*合点し、心に入りやすく、通じないところがあるという憂いは少

ラサルモン。ヤツトチンヤ、先方ヤ小學ノ

*ないのである。したがって、まずは『小学』の

道理ヲ明白ニ講ジ習、心ニ得^ユテ成就シシ、後ニ

*道理を明白に講じ習わし、心に納得しおえた後に

論語・孟子・大学・中庸ニ至テ、習ヘドンスイ、

*『論語』・『孟子』・『大学』・『中庸』に至るように習えば、

道理サトルコト安クニアルモノ。

*道理を悟りやすいのである。

○論語者 二十篇 羣弟子 記_二善言_一

論語や、齊論魯論アエヘシヨンドン、齊論ヤ

*『論語』は、齊論や魯論があるけれど、齊論は

世ニアラワリラン。今行フ所ノ^{（ママ）}者ヤ、魯論ヤスガ

*世に現れず、今行うところのものは、魯論であるが、

上論、下論分チ二十篇アスヤ、孔子加那志ノ

*上論、下論に分けて二十篇あるが、孔子様が

御門弟子ノチャアト學ヲ講ジ、天下ノ

*御門弟たちと學を講じ、天下の

治ヲ論ジテ、相互ニ問答ヘシ召フチイル善言ヲ

*治を論じて、相互に問答しなされた良い言葉を

記チアイ召ル書ヤツ時ヤ、深ク習イ知ラネイ

*記していらっしゃる書物であり、深く習い知らなければ、

ナランモノ、論語二十篇ノ字数、凡テ壺萬五千

*ならないものである。『論語』二十篇の字数は、全部で一万五千

九百一十七字アルモノ。

*九百一十七字あるのである。

(28)

○孟子者 七篇止 講道德 說仁義

孟子ヤ周ノ代ノ末、戦国^{シンゴ}之時アタ召フチ、齊梁

*孟子は、周の時代の末、戦国の時にあたりなさつて、齊梁之國ニ往^{ヨチ}マンシヤウチヤスガ、其道ノ行ワリ召フランシシ、

*の国に行きなさつたが、孟子が説く道が行われなかったので、

退^{シリッ}チ鄒ノ國ニマンシヤフチ、公孫丑・萬章ノ

*退いて鄒の國にいらつしゃつて、公孫丑・萬章の輩^{トモガラ}ノチヤアト、孟子ノ書七篇^{アラリ}著シ召フチ、

*仲間たちと、『孟子』の書物七篇を著しなさつて、

天下古今、共ニヨル所ノ道、聖賢身ニ行イ

*天下古今（の人々が）ともに依るべき道、聖賢が体で行い、

心ニ入ル所ノ徳ヲ講ジ、又天ニ本ヅイテ、性ニ

*心に入れるべき徳を講じ、また、天に基づいて、性に

ソナワタフル惻隱羞惡ノ、其ノ善ノ端^{ハシヨ}ヲ著チ

*具わっている惻隱羞惡の心は善の端緒^注（であること）を著して

ンジ、世ナテ民ヲ救^ツヲ、功用仁義ノ二ツヲ解^ホチ

*いき、世になつて民を救う、切用仁義の二つを解き

召^ミフチイル書ヤレイ、習イ知ラネイナランモノ。

*なさっている書で、習い知らなければならぬものである。

孟子七篇ノ字数、凡テ三萬五千三百七十七字アルモノ。

*『孟子』七篇の字数は、全部で三万五千三百七十七字あるのである。

(注1)『孟子』によれば「仁」である。

(29)

○作^{ルハ}中庸^ニ 乃^ニ孔^ハ伋^ニ 中^{ニシテ}不^レ偏^{カタヨラ} 庸^{ニシテ}不^レ易^{カワラ}

中庸ノ書ヤ孔子御孫^{ミマガ}、孔伋^{アサナ}字ヤ子思ンデ

*『中庸』の書は孔子の御孫の孔伋、字は子思と

云召イル人ノ御作り召フチイン。ヤスガ、此書ヤ孔子

*おっしゃる人がお作りなされた。しかし、この書は孔子

加那志ノ御弟子曾子ノ、夫子ヨリ傳ヘ授キ

*様の御弟子である曾子^{注1}が、先生より伝え授け

ラリ召チイル心法ヤテ、御孫ノ子思ヤ其道ノ

*られなされた心法であつて、御孫の子思はその道が

久シヨウニナテンジ、差ヤサンカト、恐リ召フチャル故ニ、

* 久しくなるとともに、相違していきはしないかと、恐れなされた為に、

中庸ノ書、比シ召フチ、以テ孟子ニ授キ召フチイン。

* 『中庸』の書と比較、編集しなされて、孟子に授けなされた。

ヤレイ、中ンデ云スヤ天下ノ正シキ道ヤテ、左右

* そして、「中」というのは天下の正しい道であって、左右

前後偏動ン。庸ンデ云スヤ天下ノ常ニ

* 前後（のどちらにも）偏らないこと。「庸」というのは天下の常に

定ッタ理ヤテ、古今萬々世マデン、ヒンジ易ン

* 定まった理であって、古今いつの世までも、変じ易わらない

モンヤレイ、人々皆日用、イチヨタノ間ヤテン、

* ことであり、人々がみな日用の少しの間でも、

此道ヨリハナリテイスマンモノ。中庸ノ字数、

* この道より離れてはいけないものである。『中庸』の字数は、

凡テ三千五百六十八字アルモン。

* 全部で三千五百六十八字ある。

（注1）心を修める法。特に、中国宗代の儒学で、心の体を存養し、心の用を省察する方法をいう。

○作^{ルハ}大学^ヲ 乃^チ曾子^ニ 自^リ修齊^ニ 至^ル平治^ニ

大學ノ書ヤ成人シヤウル者ノ學ヤスガ、孔子

*『大学』の書は成人になつた者の学であるが、孔子

加那志ノ遺言書ヤテ、初学徳ニ入ルノ門戸^{ゴチ}口ト

*様の遺言書であつて、初学（の人が）徳に入る門戸と

ナテウスガ、其道ヤ御弟子曾子^{ヒトリ}惟、其ムニヲ

*なっているが、その道は御弟子の曾子一人が、その旨を

得テ御作り召フチ、其三綱領ノ要^{カナミ}ヤ明徳ヲ

*修得して作りなさつた。その三綱領の要点は「明徳を

明カニシ、民ヲ新^{アラタ}ニシ、至善^{セイジン}ニトドマイスニアルモン。

*明らかにし、民を新たにし、至善に止まる」ということにあるのだ。

又其八ツノ條目ヤ、コト至リ、知識^{チシキ}致シ極ミ、意^{ココロバシ}ヲ

*また、その八つの条目は、「事至り、知識を致し極め、意を

誠ニシ、心ヲ正^{タダシヨ}シ、身ヲ修ミ、家ヲ齊ヒ、國ヲ治ミ、

*誠にし、心を正しくし、身を修め、家を齊え、国を治め、

天下ヲ平ニシ召イルモン。ヤレイ、学者ノ先方^{サチカタ}

*天下を平らかにしなさる」ということである。したがって、学ぶ者が先に勤ムベキ学ヤルモノ。大学ノ字数、凡テ壹千

*勤めるべき学である。『大学』の字数は、全部で一千八百八拾七字アルモノ。

*八百八十七字ある。

(注1)「乃」は「是。将是」の意(『新譯』)。

(31)

○孝經通 四書熟 如^{キハ}六經 始^テ可^シ讀^ム

コマヤ書ヲ讀ムノ次第云チアン。孝經ノ書ヤ、

*ここは、書を読む順序を言つてある。『孝經』の書は

曾子ノ孔子加那志ニツイテ、孝ノ道問答^フノ

*曾子が、孔子様と孝の道を問答した

御言ヲ述べ、孝經十八章御作り召フチ、孝

*御言葉を述べ、『孝經』十八章を作りなさつて、孝の

道明^ラミ召フチイル書。ヤツ時ヤ学問シヨル者ノ

*道を明らかになさっている書。それで、学問をする者

チヤ、四書直^{ジキ}ニ熟得^シシ、後ニ先方ヤ孝經讀^ムテ、

* たちは、四書を直に習熟し、その後、まず『孝経』^注を読んで、然ルノチンド、次第ニ六経ヲ讀ムルモン。

* その後に、次第に六経は読むべきである。

(注1)『孝経』、『四書』、六経的次序・由淺入深。」と相違しているようである。未詳。(『新譯三字經』)

(32)

○詩書易 禮春秋 號^ス六經^ト 當^ニ講求^{キヨス}

詩經・書經・易經・禮記・春秋ノ五經ニ、樂記

* 『詩經』・『書經』・『易經』・『禮記』・『春秋』の五經に、『樂記』を加ヘテ六經ンデ云チアスガ、今樂記ヤ世ニ絶イタル

* 加えて六経と言っているが、今『樂記』は世に絶えた

故ニ、周禮ヲ加ヘテ六經ンデ名ヅケテアン。ヤレイ、

* 故に、『周礼』を加えて六経と名付けている。そして、

學者タルモンヤ、此等ノ書ノ奥旨ヲ講ジ

* 学者たるものは、これらの書の奥旨を講じ

論ジテ、其義理ヲ詳^{ツマビラ}カニ求ムベキ。ヤツ時ヤ

* 論じて、その義理を詳細に求めるべきである。その時は

ヨルガシニスベカランモノ。

*ゆるがせにしていけないものである。

(33)

○有^リ連山^ニ 有^リ歸藏^ニ 有^テ周易^ニ 三易詳^{ナリ}

コマヤ易書ノコト云チアン。連山デ云チイスヤ、

*ここは、易書のことを言つてある。連山というのは

伏羲ノ易ヤイ召フチ、艮^ゴヲ以テ始ジミトシ、

*伏羲の（作りなされた）易で、艮を初めにして、

山ノ形^{カタチ}ヤイ、歸藏^イヤ炎帝ノ易ヤイ召フチ、

*山の（連なった）形である。歸藏は炎帝の（作りなされた）易で、

坤^クヲ以テ初^{ハジ}ミトシ、地ノカタチヤイ、周易ヤ文

*坤を初めにして、地の形である。『周易』は文

王ノ易ヤイ召フチ、乾^{ケン}ヲ始ミトシテ、天ノカタチ

*王の（作りなされた）易で、乾を初めにして、天の形

トシ、此ノ三易、委細^{イサイ}ニ覚^ワリワドヤルモン。

*とする。此の三つの易は委細に覚えなければならないものである。

○有^リ典謨^ニ 有^リ訓誥^ニ 有^{ルハ}誓命^ニ 書之奥^{ナリ}

書經や虞・夏・商・周ノ四代ノ書。典・謨・訓・誥・

*『書經』は虞夏商周の四代の（事蹟の）書である。典・謨・訓・誥・

誓・命や皆書ノ名。典や堯帝・舜帝

*誓・命はみな書の名である。^注典は堯帝・舜帝の

王命ヲ受召^{ヲキ}フチヘル書ヤテ、重^{ヲム}キ書。謨や大臣ヲ

*王命を受けなされた（ことを記した）書で、尊い書物である。謨は大臣に

ハカリ定テ、国家治ミ召ル書。訓や教イ。誥や民ニ

*諮り決めて、国家を治めまなされた書。訓は教え。誥は民に

号令^{ガツリヘ}ヲクダシヨルコト。誓や信^{マク}ト、命や命令。

*号令を下すこと。誓は信。命は命令。

ウノゴトヤスガ、書中ノ名目。奥深クニアルモンヤレイ、

*このようなものであるが、書中の題名となっている。深奥なものなので、

深クサトラネイナランモノ。

*深く悟らねばならない。

（注1）以下に出てくる「書中の名目」の意で、詳しくは「題名の一部をとった分類名」の意。

○我周公 作^ル周禮^ヲ 著^ス六官^{注一ヲ} 存^ス治體^ヲ

我トハシタシムノ言バヤルモノ。我カ周公旦ノ御作り

*「我」とは親しんで使う言葉である。我が周公旦が御作り

召フチヘル周禮ノ書ヤ、周家一代官ヲ設キ、

*なさった『周礼』の書は、周家一代官を設け、

職ヲ分ツノ為ニ御作り召フチ、天地四時^{ツカサド}司^ル

*職を分ける為にお作りなさつて、天地四時を司る

六官^{注二}著シ召フチ、天下国家ヲ治^{ヲサメ}ルノリ法ノ

*六官を設けられて、天下国家を治める法の

體ヲナガラチアイ召イルモン。ヤツ時ヤ知ラネイ

*体制を流布させなされたのである。そのことを知らなければ

ナランモン。

*ならないのである。

(注1) 天官冢宰・地官司徒・春官宗伯・夏官司馬・秋官司寇・冬官司空の六官。

(注2) ここの「著」は設立の意。

○大小戴 註^シ禮記^ヲ 述^テ聖言^ヲ 禮^{ソナリ}樂^ル備

『禮記』ノ一書ヤ、經ト稱^{シヤウ}シランアエイシヨンドン、

* 礼記の書だけは、經と称さないけれど、

五經、皆聖人ノ御製作召フチイルモンヤテ、

* 五經はみな聖人がお作りなされたもので、

經ンデ云ン。禮記ヤ後ノ儒者聖人ノ御言^バヲ

* 經と言う。『礼記』は後の儒者が、聖人のお言葉を

集ミノベテイル書ヤル故ニ、記^キトシヤウジテ、經トヤ

* 集め述べている書である故に、記と称して、經とは

称ジラン。漢ノ大戴礼ト云人ノ礼記ヲ註^注シ

* 称さない。漢の戴徳という人が『礼記』を註し

集ミ、又兄ノ子戴聖ガ註シ集ミテイ召イスイ、

* 集め（なされたのを大戴礼と言ひ）、また兄の子戴聖が註し集めなされたのを

小戴礼ト云チ、五經ニツラニテ、聖人御言ヲ述^{ノベ}

* 小戴礼と云つて、五經に連ねて、聖人のお言葉を述べ

テイ召ルモンヤテ、樂^{ガク}ノコトム、禮ノ内ニ備^{ソナリ}トフル

*ていらつしやるもので、樂のことも、礼の内に具わっている
モンヤツ時ヤ、シラネヘナランモン。

*ものであることを、知らなければならないのである。

(37)

○曰國風 曰雅頌 號四始 當諷詠

コマヤ詩經ノコト云チアン。国風ノ詩ヤ諸国ノ

*ここは『詩經』のことを言つてある。国風の詩は諸国の

風俗、正ニシ召イルモンヤテ、民ノチャアニ、歌ウタワ

*風俗を正しくしなざるもので、民の人たちに、歌を歌わ

シミテ、詠シミヨイ、又大雅、小雅ノ詩ヤ、正キ詩ヤル

*させて、詠唱させて、また、大雅、小雅の詩は、正しい詩で

モン。頌ノ詩ヤ、夫ゾリノ先公ヲ美テイル

*ある。頌の詩は、それぞれの亡父をほめている

詩ヤテ、先祖祭ノ時、用ヘヨル詩ヤン。此ノ四ツヲ

*詩であつて、先祖祭りの時に、用いる詩である。この四つを

詩ノ始ト名付テ、人々ニウタイ詠ミシミテ、

*詩の最初と名付けて、人々に詠唱させて、

心^ル悟^{サトラ}スベチモンドヤル。

*心を悟らすべきものである。

(注1)「始」は「詩」の誤り。

(注2) 国風・大雅・小雅・頌の四つ。

(38)

○詩^{ステニ}既^{ホルベテ}亡^{シヨンジヨウツクル} 春秋^{ゴシテ}作^{ホラ} 寓^{ヘンラ}褒^{リカウ}貶^{ジン} 別^{アキラ}善^ニ惡^ニ

凡^{スベ}テ詩^{カシ}や、人^{スベ}之心^{スベ}ヲ感^{カン}ジ動^{ムカ}カシメテ、善^{ムカ}ニ向^{ムカ}ワシ、風俗

*すべて詩は、人の心を感じ動かして、善に向かわし、風俗を

正^{タダシヨ}フニ成^{ナル}モン。ヤツ時^{ナリ}や詩アラワリドンスイ、王者^{ウケ}興^{ウケ}リ

*正しくするものである。それで詩が現れると、王者が興つ

ヨイ、詩^{ホロ}亡^{ホロ}ビドンスイ、王者^{ウケ}興^{ウケ}リランモンヤスガ、國風^{ウケ}・

*て、詩が亡ぶと、王者が興らないものであるが、国風・

大雅^{ヨウ}・小雅^{タヤシ}・頌^{ホロ}ノ正^{ジキ}キ詩^{ホロ}や、既^{ホロ}ニ亡^{ホロ}ベテ、王者^{ウケ}ウク^{ウケ}リラン

*大雅・小雅・頌の真正の詩は、じきに亡んで、王者が興らなか

アル故^スニ、孔子^ス加^ス那^ス志^スや、東周^スノ末^ス戰^ス國^ス之^ス時^スニ、

*たので、孔子様は、東周の末戦国の時に、

御生^{マツリ}リ召^{マツリ}フチ、王^{マツリ}ノ政^{マツリ}ゴトノ行^{マツリ}アラ^{マツリ}ンアテ、

*お生まれなさつて、王が政を行わなくて

諸侯ノチヤ専ラ放^{ホシイ}ママニナルヲ、御痛召チ、

*諸侯の人たちが専ら好きかつてにするのを、お痛みなさつて、

衛^{エテ}国ヨリ魯^ロ国ニ御^{カイ}帰リ召フチ、春秋御作り

*衛国より魯国にお帰りなさつて、『春秋』をお作り

召フチ、善ヲ褒美シ、惡ヲ刑罰^{キイバツ}シシ、善惡

*なさつて、善を褒め、惡を刑罰して、善と惡を

ハナチ、乱臣賊子^{ゾクシ}其ノ賞罰ヲアラワチイ

*離して、乱臣や賊子に賞罰を明確にし

召イル故ニ、罰ヲ天地ノ間ニノガワルコトネエンニ、

*なさつた故に、罰を天地の間に逃れることがないように

ナテ治^{ヲサ}マタルモノ。

*して、(天下が)治まったのである。

(39)

○三傳者^{デンハ} 有^リニ公羊^ハ 有^リニ左氏^{サシ} 有^リニ穀梁^{ココレヤ}

前ノ『春秋傳^{ツタヘ}』ノ書ニ、三ツアルモノ。魯ノ公羊高ノ

*前の春秋伝の書には、三種類ある。魯の公羊高の

傳^{ツタヘ}ンデ云スヤ、漢ノ何休^{カキヨ}ト云人ノ註。左丘明^{サケヤフメイ}ノ

* 伝というのは、漢の何休という人の注である。左丘明の

傳^{ツタヘ}ヤ、晋ノ杜預^{トヨウ}ト云人ノ註。穀梁^{マタ}ヤ、亦^シ、子夏^シノ

* 伝は、晋の杜預という人の注である。穀梁伝は、また子夏の

御弟子^ヲ、晋ノ花寧^{ハンネイ}ト云人ノ註。此三傳アツ

* 御弟子である晋の花寧という人の注である。この三伝あつ

トチンヤ、深ク其旨ヲシラネイナランモン。

* て、深くその旨を知らなければならぬのである。

(40)

○經^{ニシテ}既明^{ニシテ} 方^ニ讀^ミ子^{注一} 撮^{トツテ}其^ニ要^ヲ 記^ス其^ニ事^ヲ

四書六經、熟得^{ヂユクトク}シシ、其道理ノ精微^{クリシ}ヲ委^クク考イ、

* 四書六經を熟得して、その道理の精微を詳しく考え、

經学^{ムニ}ノ旨、ジキニ明ニ心ニ得^ユテ、ナサシミテ後^{アト}ニ、

* 經学の旨を、直に明らかに心に納得させた後に、

願^{ネガワク}ハ、諸子^{ネガワク}ノチヤアニ六經^{注二}ヲ讀^{ヨマ}シムベシ。ヤンドン

* 願わくは、諸子たちに書を読ませるべきである。しかし、

諸子^{ソリゾリ}ノチヤ、夫々^{ソリゾリ}ノクス、アルモン。ヤツ時ヤ、其要^{カナ}

*諸子たちはそれぞれに癖がある。その時は、その要にナル善^{ヨキ}トクル、ツミ取^{トッ}テ、ヒガミアル悪^{アシ}キ所ヲ捨^{ステ}、又其事^{コト}

*なる善い所を、摘み取つて、僻みのある悪い所を捨てて、また、その事跡^{アト}ノ實ヲ記シ、弘^{ヒロク}学ンデ、邪^{ヨクシ}マヒガムニ、ナガラシ

*跡の真実を記し、広く学んで、邪の僻みに、入りウチ入^イラシイスンベカランモノ。

*込むようにさせてはいけないのである。

(注1) この「子」は「六経以外の古代思想家の著書」の意である(『新譯』参照)。

(注2) 「二六経ヲ」は右の注1により「ノ書ヲ」とする方が適切である。

(41)

○五子者^{ゴシハ} 有^リ荀揚^二 文中子 及^ビ老莊^{サウニ}

凡テ子ノチヤアニ、書ヲ讀^{ヨマ}シミドンスイ、百家ノ書ノ

*すべて子供たちに、書をよませるなら、(諸子) 百家の書の

内、其尤ムヨキ書ライランデ、讀^{ヨマ}シモベチャルモン。

*内、もつとも良い書を書いて、読ませるべきである。

ヤレイ、此五子ンデ云チイスヤ、荀子ノ書、揚子ノ書、

*それで、ここで五子といっているのは、荀子の書、揚子の書、

文中子ノ書、老聃^{タツ}ノ書、莊子ノ書。此五書ヤ、

*文中子の書、老聃の書、莊子の書である。この五書は、

聖經ニ相替^{アイカワ}テ、世モテアソビ、羣^{グン}ヲハナリ、俗ヲ絶^{タイ}、

*聖經に替わつて、世をもてあそび、群を離れ、俗を絶ち、

仁義ヲホサガラチヘル書^{注一}。ヤツ時ヤ、其書ノ文儀ヲ

*仁義^{注二}を塞がらしている書である。それで、その書の文儀を

翫^{モテアソ}ビ撮^{トツ}テ、其道ニナガラチイスマンモン。

*もてあそび取つて、その道に流れさせてはいけなないのである。

(注1)「満たしている。(いっぱい)詰めている」の意

(注2)「善」を「仁」に訂正している。

(42)

○經子通^{ジテ} 讀^ミ諸史^{シヲ} 考^{ヘテシ}世系^{キイヲ} 知^シ終詩^ヲ

凡テ諸^{モロモロ}々ノ子ノチャ、文義^{アキラカ}明ニ通ジ習テ、アトニ

*すべて諸子たちの書の文義が、明らかに習得できた後に

諸史ノ書ヤ讀^{ヨミ}シムベシ。ノガヤレイ諸史ノ書ヤ、

*もろもろの史書を読ませるべきである。すなわち、もろもろの史書は、

一國ノ治ミ乱^{ミタリ}、興リ亡ブノ事ヲ記シ、又君ノ聖ト

*一国の治め乱れ、興亡の事を記し、また、君の聖と

狂乱ト、臣下ノ賢ト倭ヒツレイト、又何ノ世ニ

*狂乱とを、臣下の賢と諂いとを（記し）、また、何の世に

何王ヨリ始リ、何ノ世、何ノ年ニ、何王亡べ、

*何王より始まり、何の世の、何の年に、何王が亡び、

一世々代、ヨヨ継フル次第ヲ考テ、カチシロキ書記イル書

*代々継いでいる次第を考えて、書き記している書

ヤレイ、是ヲ讀ヨミドンスイ、世ノ終リ始ミ知リシラ

*であり、これを読みさえすれば、世の終わり初めが知られ

ヨルモンドヤル。

*るのである。

右合テ四十二文

光緒十壹年乙酉冬十二月誌之

梅孫著

○自義農^{注1}

至黃帝

號三皇

居上世

天地混沌之初ミ、伏羲以前、盤古氏并、天皇氏、地皇氏、人皇氏、此御四所イマンセイヤ

*天地混沌之初め、伏羲以前に盤古氏ならびに天皇氏、地皇氏、人皇氏の四人のお方がいらつしやりはシヨンドン、^{ツマビラ注3} 样カナランアル故ニ、司馬遷ガ史記

*するが、つまびらかでないので、司馬遷が『史記』を

作イ召フチ、伏羲ヲ君長ノ頭^{アタマ}トナシ召フチイン。大昊^{コフ}

*作りなさつて、伏羲を君長ノ最初となさつてゐる。大昊

伏羲氏之始テ、天地陰陽ヲ分チ、文字ヲ制シ、

*伏羲氏が最初に、天地陰陽を分け、文字を制定し、

又始テ八卦ヲ作り、著シ召フチ、万世文明ノ

*また初めて八卦ヲ作り、著しなさつて、万世にわたる文明の

太祖トナイ召フチヤフン。炎帝神農氏ノ

*太祖となりなさつた。炎帝神農氏が

始テ食物ノ五味ヲ分チ、万物ノ毒、ヨシアシヨヲ定メ、

*初めて食物の五つの味を分け、万物の毒であるかいなかを定め、

又田畠作り耕シヨル、^{注4} 菜シヨウノ道具ヲ作り出シ召フチ、

*また、田畠を作り耕す鋤を作り出しなさって、

五穀植ツガシミテ、生民養育ノ源ヲ立シミナムト

*五穀を植え継がせて、民を生み育てる根源を確立

召イヨイ。又黄帝有熊氏ノ始テ衣冠ヲ制シ、礼義

*しなさった。また、黄帝有熊氏が初めて衣冠ヲ制定し、礼義を

御定ミ召フチャコト、文明大ニソナワリ、万物コトゴトク

*お定めなさったので、文明が大いにそなわって、万物がことごとく

ソナワタル故ニ、義農・黄帝ヲ崇重ジテ、三皇トシテアガミ

*そなわった故に、義農・黄帝をあがめ重んじて、三皇として

千古、帝王ノ頭ト御ナイ召フチャウン。

*千古にわたって帝王の頭になっていらっしやる。

(注1) これ以後、訓点があつたり、なかったりする。

(注2) 義農は、伏羲（大昊）と神農（炎帝）のこと。

(注3) 「詳」の誤り。

(注4) 「萊シヨウ」は「耒耜ライシ」（鋤の意）に「を」が融合したものであろう。

○唐有虞 號二帝 相揖遜 稱盛世

黃帝ノ御ミン子、少昊^{コウ}金天氏、其御ミン子顓頊^{センキヤク}

*黃帝の御子の少昊金天氏、その御子の顓頊

高陽氏金天ノ御孫^ク、帝嚳^{コウ}高辛氏、此ノ

*高陽氏、金天の御孫、帝嚳高辛氏、この

御三所^ル、并ニ堯帝^{注2}、御二^タ所添テ、五帝ン（デ）

*御三人と、ならびに、堯帝・舜帝のお二人を加えて五帝と

云ン。ヤスガ唐ノ堯帝、虞ノ舜帝、御二^タ

*言う。しかし、唐氏の堯帝、虞氏の舜帝、お二

所ノ功德ヤ、尤ム高ク大ニアイ召ル故ニ、二帝ンデ

*人の功德は、最も高く大でありなざる故に、二帝と

名付テアン。アンアルニ堯ノ君ト御ナイ召フチャル

*名付けてある。それ故に堯が君子とおなりなされた

コトヤ、其仁天ノ如ク、其智神ノ如ク、巍々蕩々ト

*ことは、その仁は天のようで、その智は神のようで、巍々蕩々と

高大ニ御アイ召フチ、民ノチヤアンソムクコトネイラン。

* 高大でいらつしやつたからで、人民たちも背くことがない。

又舜帝ヤ、黄帝六代ノ御孫ヤイ召フチヤン。

* また、舜帝は黄帝六代の御孫でいらつしやつた。

アンアルニ、黄帝ヨリ舜ニ至リ召イル二年数、

* それで、黄帝より舜にいたる年数は、

四百八十年ヤイ召フチヤスガ、舜ノ父親ヤ徳義ノ

* 四百八十年でいらつしやつたが、舜の父親は徳義が

道ニツトラン、頑カタケナモンヤイ、ママ母ヤ誠モノ

* 道に則らず、頑な者で、継母は誠ものを

云ハン、ヒスガシナモンヤテ、毎日舜ヲ殺サントシシ、

* 言わない、心がねじけた者であつて、毎日舜を殺そうとして、

悪ヲ好注3テウタン。ヤスガ、舜王ヤ此三人ノ悪ニ當テ

* 悪を企んでいた。しかし、舜王はこの三人の悪に対して

イマンシヘヤシヨンドン、能孝友ノ道ヲ以テシ召フチ、

* いらつしやつても、よく孝友の道で（処）しなさつて、

日々ニ其善徳、四方ヨム之天下ニ、高ク貴タツトバリ召フチ、其次

* 日々にその善（仁）徳は、四方の天下に、高く貴ばれなさつて、その次

第堯帝ウンノカイ召フチ、御身ノ二所ノ

*第を堯帝がお聞きになつて、御自身のお二人の女ヲ、舜ノウナヂヤラトナサシメテ、内ヲカムラチ、

*娘を、舜の后とさせて、内を世話させて、

九人ノ御ミン子、并二百人ノ官人、其外、牛半米^{注4}

*九人の御子、ならびに百人の官人、その外、牛・羊、米
ゴラ、粟ゴラ、コトゴトクソナイテ、舜ノ内外^{ウチ}ヲ

*蔵、粟蔵など、ことごとく具えて、舜の内外を
タスキラシ、舜ヲ天下ノ御政事授キ召フチ、

*助けさせ、舜に天下の政治を授けなさつて、
其御跡位継ガシメ召フチャコト、互ニ礼義ヲ

*その位を継がせなさつたので、互いに礼儀を
厚ク譲リ譲リテ、御身ヒリクダリ、人ウヤマイ、

*厚く譲つて、御自身はへりくだつて、人を敬い、
民ヲメゴメ召イル、依テ、天下治リ、万民ム悪キ行イ^{注5}

*民を恵みなさつた。よつて、天下が治まり、万民も悪い行いが
ネインアタル故ニ、是ヲ盛ナル御代ンデ、シヤウジ

*なくなつたので、此を盛んなる御代と称して
美^ホメラツトルモノ。

*たたえられている。

(注1) 前節が「堯」なので、「堯」が二つあることになる。

(注2) 舜帝が脱落している。

(注3) 沖縄方言では「クヌムン」は「企てる。考案する」の意。

(注4) 「羊」の誤りか。

(注5) 「故二」を「依テ」に訂正してある。

式(45)

○夏有禹 商有湯 周文武 稱三王

昔、堯皇帝舜皇帝二帝ノ盛ナル

*昔、堯皇帝・舜皇帝の二帝が、盛な

御代ノ君ノ道ノ極ヲ立テ召フチャコト、

*御代の君子の道の極を立てなされたので、

其道ノ盛ナルヲ御樂ミ召フチ、道ヲ受継ギ

*道の盛んなことをお楽しみなされた。その道を受け継ぎ

召フチヘスヤ、夏ノ禹王、殷ノ湯王、周ノ文王・

*なされたのは、夏の禹王、殷の湯王、周の文王・

武王、此三所御ヤイ召ヘン。ヤスガ、武王ヤ

* 武王の御三人でいらつしやいます。しかし、武王は

暴虚^{注1}ノ君王ヲ討チタイラゲテ、萬民

* 暴虐の君王を討ち平らげて、万民を

御救ヒ召フチ、是皆三王トモ天命ヲ受キ

* お救いなさつて、これら三王ともみな天命を受け

召フチヘル始ノ祖御ヤイ召ヘル故ニ、三王ンデ

* なさつた初めの祖でいらつしやる故に、三王と

イチアン。^{注2}ヤテ二帝三王ヤ萬世ノ君ノ

* いている。それで二帝三王は万世の君の

師御ヤイ召イン。

* 師でいらつしやる。

(注1) 「虚」は「虐」の誤り。

(注2) 著者は、「四人」だが「三王」といわれていることを説明しようとしているが、論理が明確でない。「三王」を「三代の聖人」といった意に解釈すれば、理解しやすい。

三
(46)

○夏傳子 家天下 四百載 遷夏社

堯ヤ天下ヲ舜ニ譲リ、舜ヤ夏ノ禹王ニ

*堯は天下を舜に譲り、舜は夏の禹王に

譲り召フチャスガ、禹王ノ御ミン子啓ト云人ヤ、

*譲なさったが、禹王の御子の啓という人は、

賢徳ニシテ、能誠敬ミアイ召フチ、父禹王ノ道ヲ

*賢徳で、よく誠と慎みがありなさつて、父禹王の道を

ツダイ召フチャスガ、禹王御崩^{クモイ}召イタル時ニ、位ヲ

*伝えなさったが、禹王が崩御なさった時に、位を

臣下ノ伯益ニ譲り召フチャコト、天下ノ万民

*臣下の伯益に譲りなさったので、天下の万民は

伯益ヲチフクサンシヨテ、我君ノ御^{ニマミ}太子、啓ヲ

*伯益に帰服せずに、禹王の太子の啓を

君トシ拝テウタル故ニ、禹王御跡位イ、御太子

*君子として拝んでいた故に、禹王の後の位を太子が

御継召フチ、我子孫ニ順々ヨツリ召ル故ニ、

*お継ぎなさつて、自分の子孫に順々に譲りなさった故に、

天下家^注ンデ云チアン。ヤスガ十七世ノ桀王

*天下家^注といっていた。しかし、十七世の桀王は

酒食ニホキリ、惡逆無道ニアテ、天下保チ

*酒食にふけり、悪逆無道で、天下を保つことが
ウフサンシシ、亡ルダン。其間^{タキ}四百五十八年ニシテ、

*できずに、亡んだ。その間四百五十八年で、

夏ノ宗廟ホルデ、商ニウツシ、湯王天子御

*夏の宗廟が亡んで、商に移し、湯王が天子に
ナイ召フチャン。

*なりなさった。

(注1) 天下を家とした(王が天下を我が物として支配し、相伝した)ので「家天下」と言ったの意。

(注2) 「タ」は、(47)では「ダ」トアル。

四 (47)

○湯伐夏 國號^ラ商 六百載 至紂^{テニ}亡^ア

商ノ湯王ヤ、桀王ガ暴虚^{注1}ニアテ、民ノナゲケ^{ニママ}

*商の湯王は、桀王が暴虐で、民の嘆

チヨス救ワン為ニ、無道ノ桀王ホルブシテ、天下

*いているのを救うために、無道の桀王を亡ぼして、天下

保チ召フチャコト、国ヲ商ト名付テアタスガ、

*保ちなさったので、国を商と名付けていたが、

商ノ代ヨリ、殷ノ代ト改ミ替シテ、後廿八世ノ

*商の代より、殷の代と改めて、後二十八世の

紂王無道ニシテ、天下保チウフサン、国ホルダン。

*紂王は無道で、天下を保つことができずに、国が亡んだ。

其間^テ六百四十四年ヤタン。

*その間六百四十四年であつた。

(注1)「虚」は、「虐」あるいは「暴挙」の誤り。

五(48)

○周武王 始^テ誅紂 八百載 最長久

周ノ武王ヤ、紂王ガ言タリヘテ、臣下ノ諫ヲ

*周の武王は、紂王の言葉を補つて、臣下の諫を

ホシギ、智識^{シキ}タリヘテ、非ヲカザリ、姐妃ヲ

*防ぎ、知識を補つて、非を飾つたりしたが、(紂王は)姐妃^{注1}を

寵愛シテ、羣臣ヲ刑罰シ、カサゲタフル

*寵愛して、群臣を刑罰し、妊娠している

娘ヲ殺^ムシミテ、男女ノ差分ケ見^シチャイ、叔父比干ヲ

*娘を殺させて、男女の差を分けて見たり、叔父の比干を

殺シテ、心ノアナ見チヤイ、筒様^{カ注}ノ惡逆無道

*殺して、心の穴を見たり、このような惡逆無道

ナルコト、限リナクアタル故ニ、武王不^レ得^レ止コトシテ、

*なことが、かぎりなくあつた故に、武王はやむをえないこととして、

紂王誅罰シツシ、民ヲ救ヒ召フチ、周ト改テ、

*紂王を誅罰して、民を救いなさつて、周と改めて、

天下保チ召フチヤコト、天下四方ノ万民、心安ン

*天下を保ちなさつたので、天下四方の万民は、心を安ん

ジテ、チホクシツシウタスガ、十二世ノ厲王無道ニ

*じて、帰服していたが、十二世の厲王は無道で

シテ、国失ナアタスガ、宜王^キ中ウクリシツシ、天下

*国を失つたが、宜王が中興して、天下を

保チヤウタン。ヤスガ幽王ニイタテ、又無道ニシテ、

*保っていた。だが、幽王に至つて、また無道で

西戎ニ殺サツタコト、其子ノ平王ヤ東シ、洛ト云ル

*西戎に殺されたので、その子の平王は東の洛という

所ニ移シアタル故ニ、天下ウシナアタン。ヤテ周ノ

*所に移していた故に、天下を失つた。それで周の

世東周トモニ三十八世、天下保チ召イタルコト、

*世は東周とともに三十八世、天下を保ちなさったので、八百七十四年、モツトモ長ク久シキヤテ、長久ンデ云タン。

*八百七十四年、最も長く久しかったので、長久といった。

(注1)「妲己」が正しい。

(注2)「箇様」の誤り。

六(49)

○周轍^レ東^ニ 王綱墜 逞干戈 尚游説

周ノ武王ヤ、鎬ト云所ニ都トシ召フチヤスガ、十四世ノ

*周の武王は、鎬という所を都としなさったが、十四世の

平王ニ至テ、都ヲ東シノ方、洛邑ニ移シウタコト、

*平王に至って、都を東の方、洛陽に移していたので、

王ノ位ウトルテ、諸候^(ツマ)ノチヤ、王命ニシタガワン。王命

*王の位が衰えて、諸侯たちが、王命に従わず、王命は

既地ニウテタルガゴトク、干戈ノイクサ、タクマシク盛ニシテ、^{サカン}

*じきに地に落ちたように、干戈の戦が盛んで、

互ニ威勢ヲホルイ、聖賢ノ道ヲ貴バンシシ、^{タツト}

*互いに威勢を振るい、聖賢の道を貴ばずに、

利害ノ詞ヲ設テ、人ヲ動ス者ヤ、諸侯ニ召^{ミシ}ダシ、

*利害の詞を（たくみに）使つて、人を動かす者は、諸侯に召し出し、

奉公シメテ、賢人ヲ揚ゲ用ヘランタル故ニ、游説ヲ

*奉公させて、賢人を揚げ用いなかった故に、遊説を

尚^{タツトツ}ンデ云チアン。

*貴ぶと言つていた。^注

（注1）「貴んだと言われている」の意であろう。

七（50）

○始春秋 終戦国 五覇強 七雄出

春秋ヤ東周ノ末ニ、始ミ御作り召フチ、戦国ノ

*『春秋』は東周の末に、御作り初めなさつて、戦国

時ニ、筆ヲ絶ヘ終リ召フチヤン。国々諸侯ノ内、

*時代に、筆を終えなさつた。国々諸侯の内、

齊ノ桓公、晋ノ文公、宋ノ襄公、秦ノ繆公、楚ノ

*齊の桓公、晋の文公、宋の襄公、秦の繆公、楚の

莊王、此五人五覇ト云チ、各諸侯ノ頭トナテ

* 莊王、この五人を五覇と言つて、おのおの諸侯の頭となつて

ウスガ、此時、秦・楚・齊・燕・韓・趙・魏ノ七雄ノチヤ

* いるが、この時、秦・楚・齊・燕・韓・趙・魏の七雄の人たちは
出テ、各干戈ヲタクマシヨウニモテアソンデ、互ニ

* 出テ、おのおの干戈を逞しくもてあそんで、互いに
争フタル故ニ、周室ウトルタルモノ。

* 争つた故に、周室は衰えたのである。

ハ
(51)

○嬴秦氏 始兼并 傳二世 楚漢争

嬴ヤ秦ノ始皇^{シカフ}ノ氏、始皇ヤ武威強暴ニシテ、

* 嬴は秦の始皇の氏、始皇は武威強暴で、

楚・齊・燕・韓・趙・魏、此六国之英雄トタカアテ、

* 楚・齊・燕・韓・趙・魏、この六国の英雄と戦つて、
各諸侯ノチヤア亡^{ホロ}ブシ、六国ヲ兼合シ、一統ニナチ、

* すべての諸侯を亡ぼし、六国を併合し、一統にして、
天下ノ主トナツテ、弥^{イヨイヨ}(ウ)ゴリヲ發^{ハツ}シテ、自^{ミツカ}ラ、始皇

* 天下の主となつて、いよいよ驕りを發して、自ら始皇

皇帝ト名付テ、大二城ヲ築キ、天下ノ諸書

* 帝と名付けて、おおいに城を築き、天下の諸書を

焼^{ヤキ}ソクナアテ、律令ヲタツトビ、国ヲ万世ニツタ

* 焼き損なつて、律令を貴び、国を万世に伝え

ワンデ欲^{ホッ}シテウタスガ、位ヲ保ツコト三十七年ニシテ

* ようと欲していたが、位を保つこと三十七年にして

死ル時、天下ヲ二世ノ胡亥^{コガイ}ニ傳ヘテイタスガ、

* 死ぬ時、天下を二世の胡亥に伝えたが、

胡亥弥ウゴリサカンニナテ、天下大二乱リタフル故ニ、

* 胡亥はいよいよ驕りが盛んになって、天下は大いに乱れている故に

楚人陳勝ト云モノ、一タビ兵ヲアゲタコト、天下ノ

* 楚人の陳勝という者が、一度兵を挙げたら、天下の

万民、雨ノホルガ如クニ、寄来^{ヨリ}テ、胡亥ヲ項羽ト

* 万民は、雨の降るように、寄つて来た。胡亥を項羽と

云人ノ殺チャコト、始皇ガ三世ノ子嬰、楚ニ

* いう人が殺したので、始皇の三世の子嬰が、楚に

降参シテホルダン。ノガヤレイ仁義ノ道知ン

* 降参して亡んだ。そのわけは、仁義の道を知らず

シヨテ、利欲ニウブリタウタル故ドヤル。ヤスガ漢ノ

*にいて、利欲に溺れていた故である。しかし、

高祖ヲ天下ノ主ニ立テ、漢王トホフジタコト、

*高祖を天下の主に立て、漢王として封じたので、

八年ノ間、漢楚争ソウテウタン。

*八年の間、漢と楚が争っていた。

九(52)

○高祖興 漢業建 至孝平 王莽篡

漢ノ高祖ト、楚ノ項羽ト争フコト八年ニシテ、

*漢の高祖と、楚の項羽と争うこと八年にして、

項羽亡バシ、漢ウクリ建チ、天下ヲ治テ、國ヲ

*項羽を亡ぼし、漢が興つて、天下を治めて、国を

漢ト名付テ、則ス法ヲ立テ、改行テ、順々御

*漢と名付けて、法を立て、改め行つて、順々にお

繼召フチャスガ、十三世ノ孝王ニ至イッテイ、

*継ぎなされたが、十三世の孝王に至って、

臣下王莽ト云モンノ孝平ヲ殺チ、國ヲ

* 臣下の王莽という者が孝平を殺して、国を
ウバイトテイタン。

* 奪い取った。

十(53)

○光武興 爲東漢 四百年 終於獻

後漢ノ光武王ヤ、前漢ノ景帝ノ七世ノ孫^{マダ}

* 後漢の光武王は、前漢の景帝の七世の孫で

平人ヤタスガ、再^{ホタタ}ビ漢ホルイウクシテヘンデ、兵ヲ

* 平民であつたが、再び漢を奮い起こしたいと、兵を

ウコシテ、王莽^注紂^注罰シ、群盜ホルブシ、漢ノ室

* 起こして、王莽を誅罰し、群盜を亡ぼし、漢の室を

起シテ、洛陽ニ都シ召フチャル故ニ、東漢デ

* 起こして、洛陽に都しなされた故に、東漢と

云チアン。ヤスガ四百九年ニシテ、十四世ノ獻王、

* 言っている。だが、四百九年にして、十四世の獻王が、

魏ノ曹操ニホルバサツタル故ニ、獻ニ終ンデ云チ

* 魏の曹操に亡ぼされた故に、獻王で終わると言つて

アン。

*ある。

(注1)「誅罰」の誤りであろう。

十一(54)

○蜀魏呉 争漢鼎 號三国 迄兩晋

蜀ノ玄德、魏ノ曹操、呉ノ孫權、天下ヲ

*蜀の玄德、魏の曹操、呉の孫權、天下を

三ツニ分チ、鼎ノ寶^ラ道具ヲ水ノアシノ

*三つに分けて、鼎の宝道具を水の脚の

ゴト并ビ立テ、漢ノ天下ヲ争ヒタタカア

*ように並べ立て、漢の天下を争い戦つ

タル故ニ、三国ト名付テアン。兩晋ニイタヨンデ

*た故に、三国と名付けてある。兩晋に至ると

云チアスヤ、魏ノ臣下、司馬仲達(カ)孫、司馬炎ト

*言つてあるのは、魏の臣下、司馬仲達の孫、司馬炎と

云モンノ、蜀呉ヲ平ゲテ、天下一統ニナシテ、

*いう者が、蜀・呉を平げて、天下を統一して、

晋ノ武帝名付タル故ニ、両晋ンデ云チアン。

* 晋の武帝と名付けた故に、^{注1} 両晋と言っている。

(注1) 武帝は西の洛陽を都とした。その後、自言帝は東の健康を都とした。二つ合わせて両晋と言った。

十二(55)

○宋齊繼 梁陳承 為南朝 都金陵

南宋ノ武帝、晋ノ世繼テ、天下保チ召フ

* 南宋の武帝が晋の世を繼で、天下を保ちなさつ

チヤル時、天下南比ニ分チア^{注1}タスガ、八世ノ順帝

* た時、天下は南北に分けてあつたが、八世の順帝

王ニ至リ、南齊ニヨヅリツガシ召フチヤルコト、廿四

* 王に至り、南齊に譲り繼がせなさつたので、二十四

年ヤスガ、梁ノ武帝ノ為ニホルバサリ、五十

* 年であるが、梁の武帝のために亡ぼされ、五十

五年ニシテ、陳武帝受繼召フチヤスガ、三十

* 五年にして、陳武帝が受け繼ぎなさつたが、三十

三年ニシテ、隋ニホルバサリ、宋・齊・梁・陳トモニ

*三年にして、隋に亡ぼされ、宋・齊・梁・陳ともに

三十三年、金陵ニ都シウタル故ニ、南朝ンデ云チアン。

*三十三年、金陵に都していた故に、南朝と言っている。

(注1)「北」の誤り。

十三(56)

○北元魏 分東西 宇文周 與高齊

晋ノ懷帝ノ朝ニ拓跋氏ト云モンノ、北ノ方ノ地ヲ

*晋の懷帝に時代に拓跋氏という者が、北方の地を

保ツニツイテ、国ヲ魏ト改ミ、道武帝ト名付テヘ

*保つにあたって、国を魏と改め、道武帝と名付けてい

タン。ヤスガ、七世孝文帝ノ時、姓ヲ元ト改ミタル

*た。しかし、七世の孝文帝の時、姓を元と改めた

故ニ、元魏ト云チアスガ、十二世ノ時、商^{注1}歆ト云

*故に、元魏と言っているが、十二世の時、商(高)歆という

モンノ、静帝ヲトリ立テ、洛陽ニ都シ、又宇

*者が、静帝を取り立て、洛陽に都して、また、宇

文泰ト云モンノ、文帝ヲトリ立テ、長安ニ

* 文泰という者が、文帝を取り立て、長安に

都シ、ソリヨリ魏ノ国ヲ東西二分チ、宇文

* 都シ、それより魏の国を東西に分けて、宇文

泰カ子宇文光、西魏ヲホルブシ、國ヲ後周

* 泰の子の宇文光が、西魏を亡ぼし、国を後周

ト改ミ名付、又商歆ノ子高洋ガ、東魏ヲ

* と改め名付けて、また商（高）歆の子の高洋が、東魏を

ホルブシテ、文宣帝ト名付テ、國ヲ齊^{サイ}ト改ミ

* 亡ぼして、文宣帝と名付けて、国を齊と改め

タル故ニ、高齊ニ與^{アタ}フンデ云チアン。

* た故に、高齊に与えると言つてある。

（注1）『新譯』では「高歆」となっている。

（注2）「ニ與^{アタ}フ」は「與^ト」と読み、北魏は東と西に分かれ、「宇文氏の周と、高氏の齊とになった」

と解釈するのが適當であろう。『新譯三字經』参照。

十四 (57)

○迨^{ウヨンデ}至^レ隋 一土宇 不^{シテ}再^ニ傳^ヘ 失統緒

北齊・後周、既ニ亡^{ホロ}ンデ、隋ノ世ニ至ニ及テ、天下

*北齊と後周が、亡んで、隋の世に至って、天下は一統ニ赴チアタスガ、隋ノ文帝楊堅ママヤ、其ノ子ノ

*統一に赴いたが、隋の文帝楊堅は、その子の

煬帝シヤクノ為ニ殺サツテ、煬帝ヤ弥ウゴリヲ

*煬帝に殺された。煬帝はいよいよ驕つ

發テ行跡タダシカランアテ、帝統ノ筋目ヲ

*て行跡が正しくなくて、天子の血統の筋目を

失イ、天下乱テ、再ビ、ツタイウフサンシツシ、三十

*失い、天下乱れて、再び伝えきれずに、三十

八年目ウテ、其ノアト世継失イ、ホルダルモノ。

*八年目において、その後、世継ぎを失い、亡んだ。

十五(58)

○唐高祖 起義師 除隋亂 創國基

二十傳 三百載 梁滅之 國乃改

隋ノ世継アスヤ、唐ノ世ヤン。ノガヤレイ、唐ノ

*隋の世を継いだのは、唐の世である。すなわち、唐の

高祖ノ御ミン子ヤ、天下ノ万民ノ計ヘニヨリ、忠義ノ

* 高祖の御子は、天下の万民の（ためを）計らって、忠義の軍ヲ起シ、隋ノ乱ヲ除キ、群賊ヲ誅討シヤコト、

* 軍を起し、隋の乱れを除き、群族を誅討したので、

四方ノ万民歸服スルニヨツテ、帝ノ位ヲ蹈ミ、

* 四方の万民が帰服した。それで、帝位を継いで、

國ノ基ヲ始テ、仁政ヲ施シ行ヘ召フチャコト、

* 国の基を作り、仁政を施行なさったので、

唐ノ世ト名付ラツタン。ノガヤレイ、聖賢ノ道ヲ

* 唐の世と名付けられた。どうしてかという、聖賢の道を

尚トンデ、仁義ノ道行ナアタル故トヤル。ヤスガ

* 貴んで、仁義の道を行つた故である。しかし、

二十世ノ昭宜帝ニ至テイ、二百八十九年目

* 二十世の昭宜帝に至つて、二百八十九年目

ヤタスガ、後梁ニ亡バサルガ故ニ、國梁ト改タン。

* であつたが、後梁に亡ぼされた故に、国を梁と改めた。

十六（59）

○梁唐晋 及漢周 稱五代 皆有由

後梁ヨリ唐ノ昭宜帝ヲ亡^{ホル}ボチ、後梁ノ大^{ママ}祖ヲ

* 後梁より唐の昭宜帝を亡ぼして、後梁ノ太祖を

立^{タテ}テイタスガ、二世ニホルダコト、後唐ノ莊樂立テ

* 立てたが、二世で亡んだので、後唐の莊樂が立って

四世ニホルデ、晋ノ高祖タツテ、二世ニホルデ、後漢ノ

* 四世で亡んで、晋の高祖立って、二世で亡んで、後漢の

高祖タツテ、二世ニシテ亡ビ、後周ノ太祖タツテ、三世ニ

* 高祖立って、二世で亡び、後周の太祖立って、三世で

ホルダコト、此梁唐晋漢周ノ五ツ、五代ンデ稱^{シヤフ}ジテ

* 亡んだ。この梁・唐・晋・漢・周ノ五つを五代と称して

アスガ、皆逆道ニシテ、天下ノ主トナリ、故^{ヨク}ニ帝ノ

* いるが、みな逆道で天下の主となったので、帝の

筋目、永クツジウウサントルヨシノアルモノ。

* 筋目を永く継ぐことができなかった由があるのである。

十七 (60)

○炎宋興 受周禪 十八傳 南北混

北宋ノ太祖、炎宋王ヤ、後周ノ禪ヲ受キテ、

* 北宋の太祖の炎宋王は、後周の禪を受けて、

汴京^{ヒンキヤウ} ト云所ニ、都シ召フチャル故ニ、北宋ンデ名

* 汴京という所に、都しなされた故に、北宋と名

付テアスガ、十世ノ高祖ニ至テイ、都南^{ミナミ}ノ方、

* 付けているが、十世の高祖に至つて、都を南の方の

臨安^{リンアン}シヨツ所ニ移シ、是ヨリ南宗ンデ云チ

* 臨安という所に移し、これより南宗と言つて

アン。ヤスガ太祖ヨリ十八世ノ間、一所^{ヒトコロ}ニ都

* いる。だが、太祖より十八世の間、一所に都が

トドマラン、南北ニ混乱シウタスガ、都合三百

* とどまらず、南北に混乱していたが、都合三百

二十年ウテ亡ブタルモノ

* 二十年で亡んだのである。

十八(61)

○十七史 全在茲 載治亂 知興衰^ヲ

十七史トハ、史記・前漢書^注・三國志・晋書・宋書・

* 十七史とは、史記・前漢書・三國志・晋書・宋書・

南齊書・梁書・陳書・魏書・北齊書・周書・南

*南齊書・梁書・陳書・魏書・北齊書・周書・南

史・北史・隋書・唐書・五代志ノ此十七史ヤルモン

*史・北史・隋書・唐書・五代志の十七史である

ヤスガ、三皇五帝ヨリコノ方ノ、代々ノ次第全ク

*が、三皇五帝よりこの方、代々の次第を全て

此十七史ニ記チヘル故ニ、國天下ノ治リ、ミダリ、王者ノ

*この十七史に記してある故に、国天下の治り、乱れ、王者の

起リ、ウトルイノコト、委ク載テイル書ヤツ時ヤ、

*起こり、衰えのことを詳しく載せている書であるので、

是ヲ學ヒ習ラテ、知ラネイナランモノ。

*これを学習して、知らねばならない。

(注1) この次に後漢書があるべきである。

(注2) 「吏」は「史」の誤り

十九 (62)

○讀史者 考實錄 通古今 若親目

凡テ人々史記ノ書讀者ヤ、歷代ノ君臣下ノ

*すべての人々、史記の書を読む者は、歴代の君子・臣下の
實事ヲ考へ、通シ達シドンスイ、往古ヨリ今ノ

*事實を考え、通達すれば、往古より今の

事跡数万歳ノモカシノコトム、チャウト目ノ

*事跡、数万年の昔の事も、丁度目の

前ニ親シク見ガ如ク、其代々ノ国王ノヨシアシ、

*前に親しく見るように、その代々の国王の善し悪し、

邪マ正シキ、又長短得失ノ所見ダリヨルモノ。

*正邪、また長短得失を見られるのである。

廿(63)

○口而誦 心而維 朝於斯 夕於斯

凡テ学問スル人々、書ヲ讀ノスヤ、第一

*すべて学問する人々、書を読む者は、第一

其行ヘノ功ヲ進ムルコトヲ要トスベシ。

*その行いの功を進めることを肝要とするべし。

スビテ諸書ヲ讀デ、口ニテ誦ジテ、心ニ思ワン

*もろもろの書を読んで、口にそらんじて、心に思わなけれ

ドンアレイ、則、扞格^{注2}ト意^{ココロバシ}ニ不入^{シイラ}。

*ば、すなわち、かたく拒んで、心ばせに入らない。

心ニ思テ、口ニソランジランドンアレイ、則、神^{シン}

*心に思つて、口にそらんじなければ、すなわち、精神が

昏^{コラク}ニナテンジ、志^シ専定^{サダメ}ラン。アンアル故ニ学問

*暗くなつていき、志が定まらない。それ故に学問

スル者や、朝夕口^{ウチ}中ニ誦^{ソラン}ジ讀、誦^ヨシ讀ム。

*する者は、朝夕口の中に何度もそらんじ読む（べきである）。

書中ノ句々、心^{ウチ}中ニ思ヒ、玩^{モテアソ}テ、其内ノ

*書中の句々を心の内に思い、慣れ親しんで、その内なる

奥理^{クワシ}、精^{ツウ}ク通ジヨス、肝要トスベキヤルモノ。

*奥理に精通するのが、肝要である。

（注1）『新譯三字經』には「惟」とある。

（注2）「扞格」（拒み合う意）の誤り。

（注3）「玩」には「もてあそぶ」の意のほかに、「慣れ親しむ」の意がある。

○昔仲尾^{注1} 師項橐 古聖賢^{タモ} 尚^フ勤學^ニ

是^リカラ下ヤ、古人ノ學問シ召フチイルコトヲ、云チ、

*これから下は、古人が學問しなさっていたことを、言つて

今ノ小子ノ書ヲ讀コト勤メシメテ、學問勵マシヨル

*今の子どもが書を読むことを勤めさせて、學問を励ませる

次第云チアン。昔孔子加那志ノ御名ヤ仲尾^{注1}ンデ

*次第が言つてある。昔、孔子様の名は仲尼と

云召イタン。ヤスガ、魯ノ国ノ聖童、名ヤ項橐ト

*いいなさったのであるが、魯国の聖童で、名は項橐と

云人ヤ、七歳之時ニ孔子加那志ノ御師匠

*いう人は、七歳の時に孔子様の師匠に

御ナイ召フチ、孔子教イ召フチヤン。ヤレイ、孔子

*おなりなさつて、孔子を教えなさつた。それで、孔子

加那志デイスカ、生知安行^{注3}ノ聖人御ヤイ召イスガ、

*様ですら、生知安行^{注3}の聖人でいらつしゃつたが、

學問御勤召フチヤルコトヤ、聖賢ノ童ヲ師

* 学問をお勤めなさったことは、聖賢が子供を師

匠トシ召フチ、自ラ勵シ貴^{ミツカ}ビ召フチヤンデ、カンヤツ

* 匠としなさって、自ら勵まし貴びなさったと、いう

時ヤ、別テイ今ノ世ノ小子ノチャ、勤メ学バン

* ことであるので、わけても今の世の子供たちは、学ばずに

アテスモフヤ。

* いてよからうか。

(注1) 「仲尼」の誤り。

(注2) 「項^{コウタク}襄」は春秋時代の人。生まれて七歳、孔子の師となる。

(注3) 生まれながらに知り、思慮を用いることなく安んじて行う意。

廿二(65)

○趙中令 讀魯論 彼既仕 學且勤

コマヤ貴キ官ニ登テ、学問シ召フチイル次第

* ここは貴い官に登って、学問しなさっている次第を

云チアン。宋ノ趙^{注1}晋ト云人や、宋ノ太祖・太宗ヲ

* 言っている。宋の趙晋という人は、宋の太祖・太宗を

助キ揚テ、中書令ノ官トナイ召フチヤル故ニ

*助け上げて、中書令の官となりなされたので、

中令ンデ云ン。趙中令カネテ云召ニ、半部ノ

*中令と言う。趙中令はかねてからおっしゃるには、半部の

論語（ヲ）以テ、太祖ヲタスキ揚ヨイ、又半部ヲ以

*『論語』で太祖を助け上げて、また（残りの）半部で

今皇帝ヲ助ケ揚テ、仁政行ナワシミ召フチヤコト、

*今の皇帝を助け上げて、仁政を行わせなされたので、

天下都テ治リ、民安堵ニナタフス、皆論語ノ

*天下すべて治まり、民が安堵しているのは、みな『論語』の

功ヤルモノ。彼中令既ニ御奉公シ召フチ、貴キコト

*功である。かの中令はすでに御奉公しなされて、貴い

宰相ノ位ヤイ召イスガ、怠ランゴト勤メ学ンデ、

*宰相の位でいらっしゃったが、怠らずに勤め学んで、

書ヲ讀ミ召フチ、其功勞ニヨツテ、天下治ラシ

*書を読みなされて、その功勞によって、天下を治め

召フチヤツ時ヤ、別テイ未ダ御奉公ニンジラン

*なされたのであるから、まして、まだ御奉公に出ない

小子ノチヤ、勤ミ学バンアテスモフヤ。

*子供たちは勤め学ばなければならない。

(注1)「趙普」の誤り。

廿三(66)

○披蒲編 削竹簡 彼無書 且知勉

コマヤ、貧賤ニシテ、書ヲ讀テ、官トナイ召フチヘル

*ここは、貧賤で、書を読んで、官となりなされた

次第云チアン。漢ノ温舒ト云人ヤ、至極困窮ヤテ、

*次第を言つてある。漢の温舒という人は至極困窮していて、書籍買ヨル錢ネイラン。又屋家内ンデ、チンネイランシシ、^{注1}

*書籍をかうお金がない。また家の内とて、着物もなくつて、

大澤^{タク注2} シヨツ所ニ、羊ツカナテマンシイタスガ、蒲草ヲ

*大(水)沢である所に、羊を飼つていらつしやつたが、蒲を

取テ、モシルヲ織テ、蓆ヲ成シ、又人ノ尚書ヲ

*取つて蓆を織つて作り、また、人の『尚書』を

借テ、抄^{ウツ}シテ、是ヲヨミ、又公孫宏ト云人ヤ、至極

*借りて、写して、これを読み、また、公孫宏という人は、至極

困窮ヤタスガ、五十ノ年ウテ、日傭働キシシ、

* 困窮していたが、五十歳で、日雇いの仕事をして、人ノ豚ツカナアタイ、又冬ノ寒^{ヘイ}サイニ、竹林ノ

* 人の豚を飼ったり、また、冬の寒い時に、竹林の中ニ入テ、竹ノ青皮ヲ削^{キッ}リ取テ、人ノ春秋ヲ

* 中に入つて、竹の青皮を削り取つて、人の『春秋』を借テ、抄^{ウツ}シテ、是ヲ学ヒ習ヘ、又其子共ノチヤアモ、

* 借りて、写して、これを学習し、また、その子供たちも、人ノ書籍ヲ借り、勤ミ学ンテ、其学問ノ旨ヲ

* 人の書籍を借り、勤め学んで、その学問の旨をシリ召フチ、竟ニ郷相ノ貴キ官トナテ、好^{ヨキ}名ヲ

* 知りなされて、ついに郷相の貴い官となつて、名声を後世ニアラワシ召フチアン。ヤレイ今ノ世ノ学問シヨル

* 後世に表しなされた。それで、今の世の学問する子弟ノチヤア、衣食足^{タリ}イ、諸書廣ク求易ク

* 子弟たちは、衣食たりて、もろもろの書を広く求めやすくアスニツイテイ、学バンドンアレイ、自ラアヤマリ

* あるのだから、学ばなければ、自ら誤つてアランアラフヤ。

*いないであろうか。

(注1)「着物がなくて」の意

(注2)『新譯』では「水澤」(水のある沢)。

廿四(67)

○頭懸^{ラケ}梁^ニ 錐^{ラモツテ} 刺股 彼不^{レドモ}教 自勤苦

コマヤ勤ミ苦ンデ、書ヲ讀ノ次第云チアン。

*ここは勤め苦しんで、書を読む次第を言つてある。

晋ノ孫敬ト云人ヤ、夜ホキ迄書ヲ讀ミ召イタ

*晋の孫敬という人は、夜更けまで書を読んでいらつしやたスガ、常ニネモリ、ウミ怠ランコトヲ恐テ、モトドヲ

*が、常に眠り、倦み怠ることを恐れて、もとど

リヨ、ヲモナゲノ上ニ懸テ、ニモリヨホシギ、讀書

*りを梁の上に懸けて、眠りを防いで、讀書

シ召フチヤン。又蘓秦ト云人ヤ、御奉公ニアワン

*しなさつた。また、蘓秦という人は、御奉公に合わなく

シシ、家内ニ歸テチャコト、兄弟親族ノチャアニ

*て、家に帰つて来たので、兄弟親族の人たちに

賤^{イヤ}シミラツタコト、チャアキ志ヲ勵シ、書ヲ讀ニ

*賤しめられたので、すぐ志を励まし、書を読む時に

心怠^{ネイ}リ寝^ネボイ杯ノ時ヤ、錐ヲ以テ股ニ刺シ、

*心がだれて居眠りなどしそうな時は、錐を股に刺して、

一刻モ怠ランゴト、勤学ヒ召フチャン。扱テ、彼^{タイ}二人ヤ、

*一刻も怠らないように、勤め学びなされた。さて、彼ら二人は、

父兄ノ教イニインアイヘシヨンドン、自勤ミ苦ンデ

*父兄の教えでもありはするが、自ら勤め苦しんで

学問シ召フチャンデ。ヤレイ汝等小子ノチャ、居所

*学問をなさったそうである。だからお前たち小人は、居所が

安ラカニシシ、煖^注ニ衣、アクマデニ食シ、又賢父兄ノ

*安楽で、暖かく衣を着て、飽くほどに食べ、また、賢い父兄の

教ニ^{シタガフ}率テウツ時ヤ、学問勤ミハゲマスコト

*教えに従っている時は、学問に勤め励むことを

思ワンアテスモフヤ。

*思わずにすもうか。

(注1)「き」「着る」の連用形」と読む。

○如^シ囊^{ルガ}螢^ヲ 如映雪 家雖貧 學不^注輟

コマン又貧窮ニシテモ、學問廢^{スタラ}サンコト云チアン。

*ここもまた、貧窮であつても、學問を止めないことを言つてある。

晋ノ車允^{シヤイン}ト云人ヤ、家内困窮ヤテ、イトナミ方ニ

*晋の車允という人は、家庭が困窮していて、日々の生活の

ツナガツテ、昼^{ヒル}學問シヨルヒマネイランシシ、夜々學

*ために、昼に學問する暇がなくつて、毎夜學

問シヨタスガ、灯^{トボ}シアンダ、ネイランシシ、螢ヲ^{ツマ}取ツテ

*問していたが、灯油がなくつて、螢を捕つて

袋ニ入テ、其光^{テラシ}ノ照ニ學問シ召フチャン。又孫康ト云

*袋に入れて、その照らす光によって學問しなされた。また、孫康という

人シ、車允同様ノ、困窮ヤテ、夜學シヨタスガ、

*人も、車允と同様の困窮であつて、夜學をしていたが、

灯^{アシ}シ油^{アシ}ネイラン。冬極寒ノ時ニハ、出テ雪ノ

*灯油がなく、冬の酷寒の時には、(屋外に)出て雪の

氷リル光ニ學問シヨタンデ。彼^{タイ}二人トモ、家内ウリ

*氷っている光によって学問したそうである。彼ら二人とも家庭がこれ
丈^{タケ}ノ貧苦ヤテン、学問廢シ止^{ヤマ}ンアテ、竟^{ツイ}ニ

*だけの貧苦であつても、学問を止めないで、ついに

成就シシ、大ナル儒者ノ名得ミシヘタンデ。ヤスガ、

*成就して、偉大な儒者の名声を得られたそうである。しかし、

汝等小子ノチャ、今ノ世ヤ古ニカワリ、物毎^タ足リテ

*お前たち小子の者は、今の世は古に変わり、物事が足つて

居ルモンノ、彼は勤ミ学バン怠リテウス、甚タイカ

*いるのだから、あれこれ勤め学ばず怠っているのは、はなはだ

ノフアラニ。

*どうであらうか。

(注1)「輟」は「やめる」の意。

(注2)「これだけの」の意

廿六 (69)

○如^レ負^レ薪 如^レ桂^{カキルガ注1} 角 身雖^レ勞 猶^タ苦卓^{タク}

昔^シ漢ノ世ノ朱買臣ト云人ヤ、家内困窮ヤテ、

*昔、漢の世の朱買臣という人は、家庭が困窮であつて、

薪木取^トタイ、採樵^{サイセヤウ}ノ業^{リザ}シシ、其身や難儀苦勞

*薪木を取ったりして、きこりの仕事をして、その身は難儀苦勞

シ召イスガ、學問廢サ^ンアタ^ンデ。ノガヤレイ、薪木

*しなさったが、學問を止めなかったということである。すなわち、薪を

取イガ山ンカイマンシヤウチ、薪木切ル時や、書

*取りに山にいらつしゃて、薪を切る時は、書

籍ヲ林^{ハヤシ}ノ下ニ、置ヨミ召^イヨイ、又薪木取^トテ

*籍を林の下に置いて読みなさつて、また、薪を取つて

歸ル時や、書籍ヲ頭ニ掛テ、讀^ヨデ歩ミ召チ、

*歸る時は、書籍を頭に掛けて、読みながら歩きなさつて、

竟^{ツイ}ニ成就シシ、後ニ武帝王ニ御仕ヘサツテ、

*ついに成就して、後の武帝王にお仕えされて、

會稽守^{シヨ}ノ官トナイ召フチャン。又隋ノ李^リ

*會稽守の官となりなさつた。また、隋の李

密ト云人ヤ、牛ヲツナゲカデラニモ、學問貪着

*密という人は、牛を繋ぎながらも、學問に貪着^注

ノ為^{タミ}ハ少^{スコ}シノヒマモ怠ラン、牛ノ兩角ノ上ニ

*して少しの暇も怠らず、牛の兩角の上に

書籍ヲ掛キ、讀^ヨデアツチ召イル時、揚越^{ヤウエツコウ}公ト

* 書籍を掛け、読みながら歩いていらつしやる時、揚越公と

云人はヲ見^ミチ、大ニヒロマシヤシヤウタスガ、後ニ官

* いう人がこれを見て、大いに珍しがっていられたが、後に官

爵^{ホザン}タマワツテ、蒲山公ノ官ナイ召フチヤン。彼二人既^{ジキ}ニ

* 爵を賜つて、蒲山公の官になりなされた。彼ら二人はすっかり

難儀シヤウタンテイカ、猶勤ミ苦ンデ、学問シ召フチヤ

* 難儀していたにしても、なお勤め苦しんで、学問しなされた

コト、後^{アト}ノ世マデ善名著^{ヨキ}チ、身ヲ立テ召フチイン。

* ので、後世まで名声を表して、身を立てなされている。

ヤスガ、汝^ニラ小子ノチヤ、アクママニ食シテ、徒ニ日ヲ

* だが、お前たち小人は、飽くにまかせて食べ、いたずらに日を

終リ、ナス所ノハザニ入ンドンアレイ、實^{マコトニ}禽獸ニ

* 送つて、成すべき業に入らなければ、まことに禽獸に

ヒトシカランモンニナヨン。

* 等しいものになる。

(注1)「桂」は「挂」の誤り。『新譯』では「桂」が「掛」になっている。

(注2) むさばり愛して、そのことに執着すること(諸橋轍次『大漢和辞典』)。

○蘓老泉 二十七 始發憤 讀書籍

彼既老^{テモ} 猶悔^{ウソカラシコト}遅^レ 爾小生^ニ 宜^シク早思^ク

コマヤ年タケテカラ、學問セイ召ル次第云チアン。

*ここは年たけてから、學問しなざる次第を言つてある。

宋ノ世ノ蘓老泉ト云人ヤ、幼少ノ時ヤ學問

*宋の世の蘓老泉という人は、幼少の時は學問

シ召フランアタスガ、二十七歳ニ至ツテイ、始ミ(テ)幼少ウテ

*しなさらなかつたが、二十七歳になつて、初めて幼少で

其學^{マナ}バン非^{サト}ヲ曉リ、憤^{マナ}ヲ發シテ、聖賢ノ書

*學ばなかつた非を悟り、發憤して、聖賢の書

籍ヲヨンデ、竟^{ツイ}ニ大ナル儒者御ナイ召フチ、又其^{タイ}二人ノ

*籍を讀んで、ついに偉大な儒者とおなりなさつて、また、その二人の

子共シ、皆大儒ナイ召フチ、天下ニ三蘓ト名付

*子たちもみな大儒となりなさつて、天下に三蘓と名付け

ラツトフ召イン。彼老泉ヤ、既^{ジキ}二年タケマデ學問シ

*られていらつしやる。かの老泉はまったく年たけるまで學問し

召フランアテ、猶年ノウソキヨヲ悔ミ召フチャン。

*なさらずにいて、なお年の遅いのを悔やみなさった。

ヤ스가二十七歳迄八年老タル筋ネイアラン。ヤンドン

*しかし、二十七歳までは年老いたという程ではない。だけど、

人生リテ八歳ニシテ小学ニ入り、十五ニシテ大学ニ

*人は生まれて八歳で小学に入り、十五で大学に

入ルモンヤ스가、老泉ヤ年ジキニ長スルマデ、

*入るものであるが、老泉は年がまったく長ずるまで、

家内ノワツライアテ、幼少学問好ン、一旦学ヲ

*家庭の面倒なことがあって、幼少の時、学問をしようとしなかった。ある時学問を

貴^{タツトラ}ノウソキヨヲ悔テ、憤ヲ發テ、書籍ヲヨミ、

*貴ぶことが遅いことを悔やんで、発憤して、書籍を読み、

勤学ンデ大ナル儒者ノ名、世ニ著シ召フチイルコト、

*勤め学んで偉大な儒者という名声を、世にあらわしなさったことは

此通イヤレイ、汝ラ小子ノチャ、早く学問勤学ンデ、

*このとおりである。お前たち小人は、早く学問を勤め学んで

上達シ、其功ナスコト思フベチイ、他事徒^{イタツ}ラニ

*上達し、その功をなすことを思うべきで、他の事でいたずらに

年ヨラチ、後ト悔タンテイカ、及ブベカランモンドヤル。

*年をとつて、後で悔やんだとしても、とりかえしがつかないのである。

(注1)「年タケ」という名詞があつたのか、あるいは「ル」が誤脱したのか不明。

廿八(71)

○若^{コウ}梁瀬^ニ 八十二 對^{ホウシラリ}大廷^ニ 魁^{タリ}多士^ニ

彼既成 衆稱^{スナリト}異 爾小生 宜^ツ立^レ志^レ

コマヤ、学問好ノ志、老ニ至テイヨイヨ厚ニシシ、官ニ封ジ

*ここは、学問を企てる志が年取つてますます厚くなって、官に封じ

ラツトフル次第云チアン。宋ノ世ノ梁瀬^{コウ}ト云人ヤ、

*られている次第を言つてある。宗の世の梁瀬^{コウ}という人は、

御歳八十二ヤイ召イタスガ、学問勤ミ召フチ、

*御歳八十二でいらつしやつたが、学問を勤めなさつて、

言バ忠信ニアイ、行ヒ厚ク敦ニアイ召ルニ、其ノ

*言葉が忠信で、行いが重厚でいらつしやるので、その

時ノ朝廷ニ封ジラツテ、狀元^注ノアタマ官ト

*時の朝廷に封じられて、状元^注の一番の官と

ナイ召フチヤン。彼梁瀬^{コウ}ヤ、既二年タカク

* なりなされた。かの梁瀬^{コウ}は、すでに年取つて

アイ召イタスガ、才雄人ニソグリ召フチ、此大ナル

* いらっしゃったが、才能が人に勝れていらっしゃって、大いに

高名著シ召フチヘス、誠ニ古今ソビテノ人々ヨリ

* 高名をあらわしなされたのは、まことに古今すべての人々より

異ナル人ヤタンデ云チアン。ヤレイ汝ラ小子ノチヤ、

* 異なつた人であつたと言つた。だから、お前たち小人は、

此人ヲ則手本トシテ、一心ヲ立テ学ヲ尚ヒ、

* この人を手本として、一心を立て学問を貴び、

老ニイタテン、厭ヒランシヨテ、学問ニツイテノ志、

* 老人になつても、厭わずに、学問についての志を

怠ランドンアレイ、ヨタシヤンデ。

* 怠らずにいれば、よいという意である。

(注1) 科挙時代、殿試(廷試)に第一等で及第した者をいうへ『諸橋』。

廿九(72)

○瑩^{エイ}八歳 能詠^{エイ}詩 泌^{セイ}七歳 能賦^ス碁^ゴ

彼穎悟^{ナリト} 人稱^{ナリト}奇 爾幼字^{注1} 當効^ニ之

北齊ノ祖瑩ト云人ヤ、八歳ウテ能詩^{ツク}作り

*北齊の祖瑩という人は、八歳で立派に詩を作り

召イタスガ、後^{ノチ}ニ著作^{チヨサク}郎ノ官トナイ召フチヤン。

*なさったが、後に著作郎の官となりなされた。

又唐ノ世^{リヒツ}ノ李泌ト云人ヤ、七歳ウテ才智人ニ

*また、唐の時代の李泌という人は、七歳で才知が人より

ソゴリトフル次第、其時^{ゲン}ノ玄宗皇帝御ニウカテ、御^{注2}

*勝れている次第で、その時の玄宗皇帝がお聞きになって、お

城ニ呼^{ヨバ}チ御行^{イチイ}逢召ル時、玄宗ヤ張説^{シツ}ト云

*城に呼ばせて、お会いあそばした時、玄宗は張説という

人ト共ニ碁打召ル時ヤイ召イタスガ、玄宗李泌ニ

*人と共に碁を打っていらっしゃる時でいらっしゃったが、玄宗は李泌に

御タンニ召フチ、召イニ^{注3}「汝詩作リウフシヨミ」ンデ

*お尋ねなされて、おっしゃるには「お前は詩を作ることができるか」と

召フチヤコト、泌^{コタ}對イ上^アゲテ云分ニ「作ヤビン」デ

*おっしゃたので、泌は答えあげて言うには「作ります」と

御ニウキタコト、玄宗ヤ「方圓^{ハツゴン}動靜ノ詩、

*申し上げたので、玄宗は「方圓動靜の詩を

作り」ンデ仰ス召ルニヨツテ、李泌其旨ヲ乞^{コイ}

*作れ」と仰せなされたので、李泌がその旨を乞い

御ニウキタコト、張説ガ召ニ、「方^{ケタ}ヤ碁盤ノ如ク、

*申し上げたら、張説がおっしゃるには「方は碁盤のように、

圓^{マロ}ヤ碁子^{ゴウシ}ノ如ク、動^{ウゴコ}ヤ生^{イキル}ガ如ク、静ヤ死ルガ

*円は碁石のように、動くのは生きるようようで、静かなのは死ぬ

如ク」ンデ云召フチャコト、泌早ク其奥旨^{ウケムネ}ヲ

*ようで（ある）」と言いなされたので、泌は素早くその奥旨を

合点^{ガッテン}シ、「碁盤ノカクヤ、義行フガ如ク、

*合点し、「碁盤の角は、義を行うようで、

碁子^{ゴウシ}ノ動^{ウゴ}チヨスヤ、オヲハシラスガ如ク、碁子ノ

*碁石の動いているのは、才を走らせるようで、碁石が

静^シニシテ死スヤ、意^{ココロバシヨ}ヲ得ルガ如」ンデ、作テ

*静かに死ぬのは意を得たようで（ある）」と、作って

御目掛タコト、玄宗ヤ大ニ是ヲ善^{イヘ}ト御

*お目に掛けたので、玄宗は大いにこの詩を良いとお

ソウジ召チ、紫^{モラサチ}ノ衣^モ御タビ召フチ、郷相ノ

*考えなさて、紫のコロモヲお与えなさて、郷相の

位ニノブシテ、社稷ツカサド司ルノ臣トナシ召フチャン。

*位に登らせて、社稷を司る臣となされた。

扱テ、彼ノ二子穎悟ト、才能勝ソゴリテ、貴トキ

*さて、彼ら二人の子供は、才能が勝れてさどく、貴い

官ニノブタフルコト、人々美稱ホミシヤウジタンデ、ヤレイ

*官位に登ったので、人々は賞賛したということである。だから、

汝ラ幼学ノ小子ノチャ、當ニ是ヲ手本トシシ、

*お前たち、幼くして学ぶ小人は、まさにこれを手本として、

習ラアネイナランモノ。

*見習わなければならない。

(注1)「字」は「学」の誤り。

(注2)「御ニウカテ」は「お聞きになる。聞くの敬語」

(注3)「おっしゃる」の意。

卅(73)

○蔡文姬 能辨琴 謝道蒞 能咏吟

彼女子 且聰敏 爾男子 當自警

コマヤ、学問好コウミヨス、獨ヒトリ男子テヘマヤアラン。女子ヤエヘ

*ここは、學問を企てるのは、ただ男子だけではない。女子でシヨドン、聰明才智、人ニ過ギ越テ、學問習テ、

*あつても、聰明才智で、人に過ぎ越えて、學問を習つて、

抽デタフス云チアン。ノガヤレイ、後漢ノ蔡邕ト

*抜きんでていることを言つてある。すなわち、後漢の蔡邕と

云人ノ女、蔡文姫ト云人ヤ、父邕ガ琴ヲヒチャウル

*いう人の娘である蔡文姫という人は、父の邕が琴を弾いている

折ガラ、猫ノ鼠ヲトルニ、其琴ノ聲、物ノ

*折りに、猫が鼠を捕つたので、その琴の音色は、物が

死ノ時ノアビリ声アルコトヲ知り、又董卓ト

*死ぬ時の叫び声であることを知つて、また、董卓と

云モンノ、政コトヲ放ママニスルニ依テ、父邕ヤ憂ル

*いう者が、政治を自分の思うとおりにするので、父の邕は憂え、

時ノ心アツテ、琴ヲヒチャコト、文姫ヤ其父ノ琴ノ

*ある時、琴を弾いたので、文姫はその父の琴の

音声、焦殺ツテ、危難ニ至ントスルノ声ヤテ、

*音色は、焼き殺される危難にあう音であつて、

深ク心ニ痛ミウタスガ、案ノ如ク、父ノ邕ヤ董

*深く心痛していたが、案のごとく、父の邕は董

卓ニ誅罰シラリテ、死^シヂヤン。又文姫ヤ田舎^{イナカ}(二)

*卓に誅罰させられて、死んだ。また、文姫は田舎に

流^{ナガ}サツタコト、田舎ニ於^{ウイテ}、自ラ笳^{ホエ}十八栢ノ曲音ヲ作テ、

*流されたので、田舎で自ら笛の十八栢の曲^{注1}を作つて

吹^ホチヤコト、其音中国ニ流布シシ、カソカニ

*吹いたので、その音曲は中国に流布して、かすかに

怨^{ウラ}ミカナシミ、痛ムノ情ソナワテウタコト、曹孟徳^{サウ}

*怨み、悲痛の情が備わっていたので、曹孟徳が

此ノ音ヲ聞^{チキ}、是ヲ善^{エホ}ト思ヒ召フチ、千金ヲ以、

*この音曲を聞いて、すばらしいと思ひなさつて、千金を払つて、

文姫ヲアガナイ歸^{カイ}チ、士人ノ董^{ジョウ}祀^{注2}ト云者ノ妻ト

*文姫を購つて帰して、侍の董祀という者の妻に

ナシ召フチヤン。又謝道韞ト云人ヤ、晋ノ宰相、謝安ガ

*なされた。また、謝道韞という人は、晋の宰相である謝安の

兄ノ女^ミヤタスガ、詩作能^{ヨウ}シヨンデ云チャコト、叔父ノ安ヤ^ア

*兄の娘であつたが、詩を良く作ると言つたので、叔父の安は

作^{ツク}テイル詩文見^シチ、此女ヲホミテ、アトニ王右車^{注3}ト云人ノ

* 作つてある詩文を見て、この娘をほめて、後に王右車という人の子に嫁シミテイタスガ、夫死コト、節義ヲ守ルノ詩ヲ

* 子に嫁入りさせたが、夫が死んだので、節義を守るとの詩を作テ守^{マモ}タフタル故ニ、此詩ヲ以世ニアラワリ、聞イタンデ。

* 作つて守つた故に、この詩で世にあらわれて、有名になったということである。

彼女子デイスガ、聰明才智ニシテ、琴音^{ツマビラカ} 詳ニ、トリ^{サト} 曉リ

* このように女子であるが、聰明才智で、琴の音曲に詳細に悟り、

又詩文作テ、節義守ルコト、此通ヤツ時ヤ、別テヘ

* また詩文を作つて、節義を守ること、このとおりであつた。まして

汝ラ男生リテ、彼女子ニ劣^{ウトル} テイスマン。アツ時ヤ、自ラ

* お前たち、男に生まれて、かの女子に劣つてはすまない。だから、

心戒シミテ、学問深ク学テ、其道理明白ニシテ、

* 心を戒めて、学問を深く学んで、その道理を明白にして、

其奥旨^{ウケムネ}ヲ早く曉リ知ルベチドヤル。

* その奥旨を早く悟り知るべきである。

(注1) 「胡笳十八拍之曲」のこと。

(注2) 「董」の振り仮名がなぜ「ジョ」なのか不明。『新譯』は「董祀」とする。

(注3) 『新譯』は「王擬車」とする。

○唐劉晏 方七歲 舉^{ラレ}神童^{注1} 作^ル正字^{ト注2}

彼雖^レ幼^ト 身已仕^フ 爾幼学 勉^{メテ}而致^ス

有^ル爲者 亦若是

唐ノ劉晏ト云人ヤ、聰明才智、

*唐の劉晏という人は、聰明で才智が

每人^{ツネ}二過越テ、童^ビノ年ウテ、聖賢之諸書

*常に人に過ぎ越えて、童の歳で、聖賢のもろもろの書を

飽^{アクマデ}ニ学^{マナ}デ、方^{ツサ}ニ七歳之時ウテ、玄宗皇帝ノ

*飽くまでに学んで、まさに七歳の時に、玄宗皇帝が

御通イ召ル時、御ノリモノヲトドミテ、書^{タテマツ}奉ルコト有^アテ、

*お通りなされる時、お乗り物を止めて、書を奉ることがあつて、

其才智ヲ御感ジ召フチ、大ニヒロマシヤシシ、美^{ホミ}テ、

*その才知をお感じなさつて、大いに珍しがられて、褒めて、

則チ、翰林院ノ正キ字ヲ司^{ツカサド}ル官トナサシメ召フ

*すぐに翰林院の正しい字を司る官になしなさつ

チヤン。已^{スデ}ニ七歳ウテ、御奉公ニ進ムニヨツテ、人々皆神

*た。早くも七歳で、御奉公に進んだので、人々はみな「神童ト美^{ホミ}ラツテウン。アル日御城ニ御用シ召フチ、ウナ

*童」と言つて褒められた。ある日、お城に御用をしなさつて、おヂヤラニ、御行^{イチイ}逢シ召フラチャコト、ウナヂヤラ、此劉晏

*后にお会いなさつたので、お后はこの劉晏を

御カナシヤシ召フチ、御身ノツンシノ上ニ居召フラチ、

*かわいがりなさつて、御自身の膝の上に座らせなさつて、

御手ヅカラ劉晏ガカラズ結^{ヨウ}イ召フチャコト、其時

*お手ずから劉晏の髪を結びなさつた。その時、

玄宗皇帝、劉晏ニ問テ召ニ、「汝^{スデ}ジ既ニ正字司ル

*玄宗皇帝は劉晏に問いなさつて、「お前はすでに正字を司る

官ナサシミテアスガ、幾^{イッ}字ヤ正シカラ^{タケ}ンモンノアルヤ」ンデ

*官にさせてあるが、幾つの字が正しくない文字であるか」と

御尋^{タシニ}召フチャコト、劉晏俯^{ホフク}伏シテ、對ヒ上テ云分ニ、

*お尋ねなさつたので、劉晏は伏して答えあげて言うには、

「四書五經ノ内、スビテノ字、正シクニアスガ、惟^{タケトモ}朋ノ字

*「四書五經の内では、すべての字が正しいですが、ただ朋の字は正シカラ^{キタシ}ンアヤビヘン。蓋^{キタシ}思^シテ見^ミデイ、朋^{トモ}ノ字ヤ兩^{ツキ}月並テ

*正しくありません。まあ、思ってみますに、朋の字体は二つの月が並んで體正シカランアスガ、諸國ノ讒臣事ヲモチヘテ、君ノ

*（斜めになつていて）正しくありませんが、諸國の讒臣が悪事もちいて、君主に寵倖ヲタノモニヨツテ、其時ニ朋ノ字ヤ佞臣ニ

*かわいがられるのを期待するが、その時には朋の字は、その佞臣に比ビラツテ、正シカラナル筈」ンデ、ウンニヨキタコト、

*なぞらえて、字体が正しくないのでしょう」と、申し上げたので、

玄宗ヤ「人ト大ニ異リ替トフン」デ云召チ、猶又

*玄宗は「人と大いに異なつて變つてゐる」とおっしゃつて、さらにまた

戸部尚書ノ官封ジ召フチャンデ。扱テ劉晏ヤ

*戸部尚書の官になさつたそうである。さて、劉晏は

只才能、人トカワトフルテイマヤアラン。正シキヨヲ崇ビ、

*ただ才能が人と變つてゐるだけではない。正しいことを貴び、

邪ヲ黜^{シリゾク}ノ心アタル故ニ、其身既ニ幼少ヤヘイシヨンドン、

*邪を退ける心があつた故に、その身はまだ幼少であるけれども、

御奉公ニ進ミラリ召フチャン。ヤレイ汝等小子ノチャ幼キ

*御奉公に上がったのである。だから、お前たち小人は、幼い

ナキ時ウテ、學問油斷サンゴト、勤ミ學ンデ、道理致シ、

*時に、學問を、油断しないように、勤め學んで、道理を明らかにし、
キワミ知ルベチイ、凡テ何事ムナサンデ思フ心、ハタンデ果勤ミ行

*窮めて知るべきである。すべて何事もしようと思う心を(起こし)果敢に、勤め行い
ドンスイ、決テキツ注3遂トギランデルコトヤネイラン。別ヒツシテイ學問ヤ、

*えば、けつして遂行できないことはなし。まして、學問は
尚切ナウタシカニナサンデ思ヒドンスイ、モトドフリヲナリ繩ヒツニ懸キ、

*なおのことで、切実にしようと思えば、もとどりを繩に掛けるとか、
錐キリヲ股ニサスノ志シアイドンスイ、又カコノゴトキ如ヨキノ善名ヤ、

*錐を股にさすとかの志があれば、また、このような名聲は
自然ト得ラリヨルモノンデ。

*自然とえられるということである。

(注1) 神童科の試験を合格したことをさす。

(注2) 「正字」をする、唐の時代の官職名。

(注3) 「キツシテ」の「シ」が脱落している。

卅二(75)

○犬ハ守リ夜ラ 鷄ル司ラ晨ラ 苟バ不レ學バ 曷ゾ為ナレリ人レ

コリヨリ下ヤ、人トシテ學問サンデノ志シネイランバ

*これより下は、人として学問をしようとの志がなく、
毎々放逸輕薄ニシテ、徒二日暮シヤウル

*常々から放逸輕薄で、いたずらに日を暮らしている

怠懈ノ者ヲ改心ナサシメル為ニ、犬獸ノ各

*怠け者を改心させるために、犬などの獸がおの

職分ウコリラン、守トフスニ類引シシ、戒ミラツトン。

*その職分を怠らず、守っていることに類引シテ、戒められている。

ノガヤレイ、犬ヤ夜ヲ守ノ能アツテ、盜賊ノ

*すなわち、犬は夜を守る能があつて、盜賊の

防ヲナシテ、主人ニ辛苦難儀ノ憂ヘ及バサン。

*防犯をして、主人に辛苦難儀の憂いを及ばさない。

又鶏ヤ知仁勇ノ三徳アルモン。是又ノガヤレイ、喰物

*また、鶏は知仁勇の三徳があるのである。これもまた、すなわち、食べ物を

目當ドンスイ、己ヤ喰ワンゴト、其ノ子ヲ呼テ

*目にすれば、自分は食えずに、その子を呼んで、

與ヘ、又毎日勇ミ立怠ランゴトシウイ、又時ヲ

*与え、また、毎日勇み立ち、怠らないようにして、また、時を

司リ、曉キ起テ人々起シミテ、天ノ時知ラシミヨイ、

* 司り、曉に起きて人々を起こして、天の時をしらせている。

犬イヌニワトリ鶏 デイスガ、此通イ、各トリ守ルベキ所ノ

* 犬や鶏であるが、このとおり、おのおの取り守るべき所の

能アイ、別ベツシテイ人ヤ、萬物ノマサシキ靈者トシテ、

* 能力がある。まして人は、万物の靈長として、

徒二日ヲウクリ、自ラ心ル安ンジテスノル注3モンヤルフヤ。

* いたずらに日を送り、自ら心を安んじてすむものであろうか。

古ヨリ聖人賢人モ、学ニヨツテ人トナイ召フチャン。

* 古から聖人賢人も、学問によって人となりなされた。

誠二凡人ボシノ、学問習ヘ知ンドンアレイ、事ノ是非

* 真に凡人が学問を習い知らなければ、事の是非を

分チ知コトナラン。又君親ニ忠孝ノ道、盡ツクシヨル

* 分けて知ることがない。また、君親に忠孝の道を尽くす

心モ薄ウツクニナリ、其外、惡逆・無理・非法ノ邪道ニ

* 心も薄くなり、その他、惡逆・無理・非法の邪道に

ウチ入り、其身ノ恥ハツカシメ、祖親ノ名折ニンナテ行ルイチヨ

* 入って、自分の身を辱め、祖親の名折れになっていく

モンヤンニツイテイ、日々ノ學業、少ム怠ランゴト、勤メ学バンドン

*ものであるので、日々の学業を少しも怠らないように、勤め学ばなけ

アレイ、却^{カヘ}テ^{キイケン}鶏犬^ノ、トルベキ能^{ノウ}ニ及バン。アツ時や、

*ば、かえつて鶏犬の取り得の能力にも及ばない。それで、

チヤアシ人ンデ云ヘノナラフヤ。

*どうして人ということができようか。

(注1)「シ」は衍字。

(注2)「ウコタラン」(怠らない)の誤りか。

(注3)「済み居る」の音融合した形で、「済む」の意。

卅三(76)

○蠶^ク吐^ラ絲^ラ 蜂^{カモス}釀^ラ蜜^ラ 人不^バ學^バ 不如^{ニダモ}物

コマヤ学業勤ミ学バンドンアレヘ、蚕子ノ虫ニン

*ここは、学業を勤め学ばなければ、蚕の虫にも

シカンアスニ比^{クラ}ビテ云チアン。ノガヤレイ、蚕子ヤ

*及ばないことになぞらえて言つてある。すなわち、蚕は

糸ヲ吐^{イト}、衣服製作ノ大切成用、ソネイ

*糸を吐き、衣服を作る大切な用を具え

ラシヨイ、又ハヂヤ蜜ヲカモシテ、人ノ根氣補フ

*させている。また、蜂は蜜を醸して、人の根気を補って

ヨル、薬用ノ助^{タス}キナサシミヨン。僅^{ワツカスク}小シキナル虫^{カウ}デイ

*いて、薬用の助けをささせている。ほんの小さな虫である

スカ、人ノ衣服ノ用、薬用助^{カウ}キルノ功アイ、大ナル

*が、人の衣服の用、薬用助けるの功がある。(それに比し) 大きな

人トシテ、其^{ノウ}功能、學業^{スタ}廢ラチ捨テヘドンスイ、虫ノ

*人間で、その功能、学業を捨ててもすれば、虫の

小シキ物ニモ、シカン^注モンドヤル。

*小さい物にも及ばないのである。

(注1)「シカン」は「如かん」(及ばない)であろう。

卅四(77)

○幼^{ニシテ}而^{ニシテ}學^フ 壯^{ハシ}而行^ラ 上^{ハシ}致^ラ君^{ハシ} 下^{ハシ}澤^ラ民^ラ

凡テ世ノ人々、幼^{イトキ}ナキ時ニ勤ミ学ンデ、壯^注年^{イタツ}至^テイ、

*すべて世の人々は幼い時に勤め学んで、壮年に至って、

其勤ミ学ブ所ノ功アツテ、仁義ノ道ヲ守リ、

*その勤め学ぶ所の功があつて、仁義の道を守り、

誠ヲツクシテ、行ナイドンスヘ、御奉公ニ進ミ揚ラリテ、

*誠を尽くして、行えば、御奉公に進め揚げられて、
官禄ンスデテ、父母妻子、ヨツカ豊ニ養育サリヨン。

*官禄も頂いて、父母妻子も豊に養育できる。

又上ハ君ヲ致シ、忠節ヲ盡シテ、堯舜ノ君ノ

*また、上は君子に仕え、忠節を尽くして、堯舜の君子の
如ニナラシミ、又下ヤ、其民ヲウルワシ、仁澤ヲ万民ニ

*ようにならせて、また、下は民を潤わし、仁沢を万民に
施クシテ、堯舜ノ民百姓ノ如ク、ジヨウタク潤澤ナラシメイス、

*施して、堯舜の民百姓のように、潤沢にさせることを
願テ学ビワドヤルンデ。

*願つて学ばなければならないということである。

(注一)「二」がない。

卅五(78)

○揚ニ名聲ヲ 顯ニ父母 光ニ於前ヲ 裕ニ於後注一ニシヲ

凡テ人々学業学ンデ、大ナル儒者トナイドンスイ、

*すべて人々が学業を学んで、偉大な儒者となれば、

聲名四方ニ立ン。又君ニ御奉公スルニ、名臣ナイドンスイ、

*名声が四方に立つ。また、君に御奉公して、名臣になれば、

褒賞父母ニ至マデ、加ヘリヨツ時ヤ、全ク忠ヲツクシ、

*褒賞が父母にまで加えられよう。またその時、全く忠を尽くし、

孝ノ道ヲツクシ、廉直正道ニシイドンスイ、自^{ヲノツカ}ラ名声ヲ

*孝の道を尽くし、廉直正道にすれば、おのずから名声を

揚ギ、父母ノ名ヲアラハチ、其盛ナル徳、大ナル業^{ワサ}、前ノ

*揚げ、父母の名を現して、その盛んな徳、大きな仕事

祖宗ヲ光リ輝シ、積善ノ餘慶、後ノ世ニ裕^{ヨタカ}ニシ、

*祖宗を光り輝かし、積善の余慶が後世にいつぱいにし、

ウノゴトシヨス、チヤアシ書ヨムノ大ナル功^{カウ}アラフヤ。

*このようにするのは、どうして書を読む大きな功でなろうか。

(注1) 竹原家文書九四『三字經』では「垂」となっている。

卅六(79)

○人遺^{スニ}子^ニ

金滿^ツ

簪^{エイニ注一ハルニ}

我教^{ハコニ}子^ハ

惟一經

コマヤ上文ヲ總^{ココイモツン}結^{ハコニ}テ云チアン。凡テ世ノ人ヤ、大^{ワラ}カタ

*ここは上記の文を総括して言つてある。すべて世の人は、大方、

子孫ニノクシ與ヘルニ、金銀ノ財宝ヲ重ンジテ、箱ニ滿^{ミタ}シ、

*子孫に残し与えるのに、金銀の財宝を重んじて、箱に満たして、
與へヨスガ、我伯厚^{フク}や、子ノチヤアニ與ヘルニ、只此三字經

*与えるが、私、伯厚は子供たちに与えるのに、ただこの三字經
一書残シ與へテアン。ヤレイ是ドン委ク教イ習^{ナラリ}シミテ、

*一冊残し与えてある。そして、これさえ詳しく教え習わせて、
儒者ニ至^{イタラ}シドンスイ、自ラ千万億ノ金銀ノ財^{キンゲン}

*儒者にさせれば、おのずから千万億の金銀の財

宝モ其中^{ウチ}ニアルモンヤツ時や、永代ノ子孫ニ至テモ、

*宝もその中にあるであるから、永代の子孫になっても、

親ク勤^{シタシ}ミ學バチ、富貴ナラシミイス、願テ居ルモノ。

*自ら勤め学ばせて、富貴にならせるのを願つてのことである。

(注1)「贏」は箱籠の意。

卅七(80)

○勤^ニ有^レ功 戲^{レバ}無^レ益 戒^{メヨ}之^シ哉 宜^ク勉^ミ力^モ

コマヤ總^{ソウ}ジテ、後^{アト}ノ世ノ学者ノチヤア戒テアン。凡^{スベ}テ

*ここは総じて、後の世の学ぶ者たちを戒めてある。すべて

之人々、学問ニツイテ、心力ヲ盡シ勤ミ学ビドンスイ、

*の人々が学問について、心力を尽くして勤め学べば、

日々ニ其功積^{ツモ}テンジ、益増^{アジ}テ其功アルコト、疑^{ウタガイ}イ

*日々にその功が積もつていき、益が増してその功があることは疑い

ネイラン。又怠^{ウクタ}リ懈^{ウクタツ}テ戯遊^{タバフリ}ビドンスイ、益^{イキ}

*ない。また、怠つて戯れ遊べば、益が

無^{ナク}シテ損^{ソン}アルコト、疑^{ウタガ}イネイラン。ヤテ昔^{モカシ}ノ

*なく、損があることは、疑いない。だから昔の

聖賢や、生民教育方ニツイテイ、則^{イリ}法ヲ定ミテ、

*聖賢は、生民の教育方法について、法則を定めて、

国学郷学ヲ建テ、各師匠ヲ立テテ、学者ノ

*国学・郷学を建て、おのおの師匠を立てて、学ぶ者

チヤア教イ導ビカサンドンアレイ、蒙昧^{モウマイ}ニナテンジ、

*たちを教え導こうとしたのである。そうしなければ、蒙昧になっていき、

五倫五常ノ道、分チ知ルコトナラン。或イ不正不

*五倫五常の道を理解することができず、あるいは不正不

義ノ事ヲ致^{イタ}シテ、罪科^{ツミ}ヲ蒙リ、祖親兄弟ノ面

*義の事をして、罪科を蒙り、祖親兄弟の面

目ヲ失ヒ、或イ一郷ノ名聞ニツイテン、後ノ世ニ至ル迄、

*目を失い、あるいは村里全体の評判についても、後の世に至るまで

悪キ名ヲ流リラチ、行ルモンドヤル。ヤレイ第一

*悪い名を流していくものである。だから、第一に

親兄タルモンヤ、各子弟ノチャアノ、学業勤ミ

*親兄たるものは、おのおの子や弟たちの学業を勤め

勵スベキ所ヤ、常々、氣ノ附、懇ニ諭シテ、

*励ますべきところは、常々、氣を付けて、懇ろに諭して、

怠リ戯リノ志去シミテ、専ラ学業勤向ノ

*怠り戯れる心を去らせて、もっぱら学業の勤め向きの

業ニ進マチ、成長ニ及デヤ、撰舉之冥加ニ

*業に進ませて、成長したら、選挙される幸せに

至ラチ、聖賢教養ノ道、立テイ召イル則法、

*至らせて、聖賢教養の道を立てなさる法則を

廢サンゴト、厚ク重ニシミテ、全ク忠孝ノ大道ニ

*廃らせないように、厚く重くさせて、まったく忠孝の大道に

叶ワシヨス、要ミトスベキモントヤル。

*叶わせるのを、肝要とすべきである。

三字經俗解 終

梅孫著

右合テ三十八文 惣テ八拾文

光緒十二年*丙戌春二月誌之

* * * *

殘簡A (『三字經俗解』の帙に入っているが、綴じ合わされていないもの。(79)の一部と(80)の全てが書か

れている。)

(注) 以下については、下書きの部分をもそのまま記し、修正されている部分は注で記すことにする。

また、訳は省略する。

與ヘヨスガ、我伯厚^リヤ、子ノチヤアニ與ヘルニ、只此三字經

一書殘シ與ヘテアン。ヤレイ是ドン委ク教イ習ワ

シミテ、(儒)者ニ至シドンスイ、^{ウノツ(カ)}自 ラ千萬億ノ金銀ノ

財宝ム其内ニアルモンヤツ時ヤ、永代ノ子孫(ニ)至テモ、

親シク勤ミ學バチ、富貴ナラシミイス、願テウルモノ。

○勤^ニ有^レ功 戲^レ無^レ益 戒^メ之^ヨ哉 宜^ク勉^ム力^ニ

コマヤ總^{ソウジ}テ、後ノ世ノ学者ノチヤ戒テアン。凡テノ

人々、学問ニツイテ、心力ヲ盡シ勤ミ学ビドンスイ、

日々ニ其功積テンジ、益増ルコト、ウタガイネイラン。^{注1}

又怠リウコタツテ、戲リアソビドンスイ、益ナクシテ損アルコト、

ウタガイネイラン。ヤテ昔ノ聖賢ヤ、人々教育^{キヤウイク}

方ニツイテイ、学校所ヲ建^{タテ}、師匠ヲ立テテ、学者ノ

チヤ教イ導ビカサンドンアレイ、蒙昧ニナテ、^{注4}

五倫五常ノ道ツクスコトナランモン。ヤツ時ヤ^{注5}

第一親兄タルモンヤ、各子弟ノチヤノ、学業

勤ミ勵スベキ所ヤ、常々、懇^{ネンゴル}ニ諭シテ、

怠リ戲リノ心ヲ去^サラシミテ、学問ニ進ルコトヲ

要^メトスベキモノンデヤルンデ。^{注6}

(注1)「ルコト」を消し、「テ其功アルコト」と訂正している。

(注2)「ツイテイ」の次に「則法ヲ定テ」を挿入している。

(注3) 墨で「ンヂ」を挿入するように指示して、それにケチをつけている。

(注4) 墨で「ンヂ」を挿入するように指示してある。

(注5) 「ツクスコトナランモン。ヤツ時ヤ」を消し、「ン全ク盡スコトナラン。間ネイ不行跡ノコト
シイ出チ、祖親兄弟ノ面目ヲ失ヘ、或ハ一郷ノ名聞ニツイテ(ン)、アトノ世(マ)テ、悪キ
名ヲ流(リ)ラチ、行ルモンドヤル。ヤレイ」と訂正している。

(注6) 「学問ニ進ルコトヲ要メトスベキモノンデヤルンデ」を消し、「専学業勤向ノ業ニ進マチ、成
長ニ及デヤ、撰舉ノ冥加ニ至ラチ、聖賢之教育、立テイ召イル則法、廢サンゴト、重ク厚ニ
シミテ、忠孝之大道ニ叶ワシヨス、要トスベキモンドヤルンデ」と訂正している。

残簡B (竹原家文書九四『三字経』の後ろに綴じ合わされているもの。(80)の漢文を除いた部分が書かれて

いる。)

*朱で訂正している部分がない。

コマヤ總^{スウ}ジテ、後^{アト}ノ世ノ学者ノチヤア戒テアン。

凡^{スビテ}ノ人々学問ニツイテ、心力ヲ盡シ勤ミ学ビ

ドンスイ、日々ニ其功積^{ツモ}テンジ、益増テ其功

アルコト、疑^{ウタガ}イネンラン。又怠リ懈テ戯リ遊ビ

ドンスイ、益キ無シテ損アルコト、疑イネイラン。

ヤテ昔ノ聖賢ヤ、生民教育方ニツイテイ、

則法ヲ定ミテ、國學^{キヤウ}鄉國ヲ建テ、各師匠ヲ

立テテ、學者ノチャア教イ導^{ミチビ}カサンドンアレイ、

蒙昧ニナテンジ、五倫五常ノ道分チ知ルコトナラン。

或イ不正不義ノ事ヲ致^{イダ}シテ、罪科ヲ蒙リ、祖親兄弟ノ

面目ヲ失ヒ、或イ一郷ノ名聞ニツイテン、後ノ世ニ至ル迄、

悪^{アク}キ名ヲ流リラチ、行^{イデヨ}ルモンドヤル。ヤレイ第一親兄

タルモンヤ、各子弟ノチャアノ、學業勤勵^{ツトミハケツ}スベキ

所ヤ、常々、氣^キノ附^{ツチ}、懇^{ネンゴル}ニ諭^{サト}シテ、怠^{ウクダ}リ戯^{タバフ}リノ

心ヲ去^{サラ}シミテ、專^{ツトミ}ラ學業勤向^{モキ}ノ業ニ進^{ワザ}マチ、

成長^{セイチャ}ニ及デヤ、撰^{シンキヨ}舉^{イタ}ノ冥加ニ至ラチ、聖賢教養

ノ道、立^{タテ}テイ召^{スツケ}ル則法、廢^{スツケ}サンゴト、厚^{アツ}ク重^{ウモク}ニシミテ、

全^{カナ}ク忠孝ノ大道ニ叶^{カナミ}ワシヨス、要^{カナミ}トスベキモンドヤル。

〔主な引用文献・参考文献〕

黃沛榮注訳『新譯三字經』三民書局印行 一九九二年

諸橋轍次著『大漢和辞典』大修館書店縮刷版第三刷 一九八一年

比嘉春潮著『比嘉春潮全集』第四卷評伝・自伝 一九七一年

比嘉春潮著『比嘉春潮全集』第三卷文化・民俗 一九七一年